慈濟

ものがたり

ツーチー　2019年11月　*275*

●表見返し　文・證厳法師
訳・済運　撮影・黄筱哲

六度の修行に精進することで善法を普遍に行き渡らせる

浄らかな心で菩薩の六行を修行する時、
疲れを知らなければ、大いに精進しているのである。
様々な衆生の本性に沿って教えることで、
異なった法理の意義を理解させることができる。

目次

【社論】
あの年を忘れるなかれ　慈願／訳　4

【主題報道】
回顧と悟り　あの年を忘れるなかれ　済運／訳　8
天地が揺れたあの日　生命の刻印　有田夏子／訳　18
私の九二一物語
足で稼いだ再建の縁　惟明／訳　40

【百の流れは海へと帰る】
心ある慈済　明浩／訳　52

【E世代と善世代】
他と違う「ポテンシャル太鼓」　明浩／訳　56

【證厳法師のお諭し】
愛の奉仕に愛を知る　慈願／訳　68

【お板さんが法の香に浸る】
家事から処世術を学ぶ　高雪白／訳　74

【特別報道　ヨルダン】（上）
アラブのミスターチェン　善耕／訳　76
ヨルダンの大砂漠に慈悲のナビゲーション　慈願／訳　86

【衲履足跡】
現実と向き合う　済運／訳　100
慈済大事記【十月】　済運／訳　106

表紙

どうやってヨルダンの広い砂漠に散らばっているベドウィンとシリア難民を探し出したらよいのか？現代人はＧＰＳを使って道を探すが、ヨルダンの慈済ボランティアには愛のＧＰＳが備わっている。見渡す限りの黄土の大地を前に、陳秋華師兄は散らばって住んでいるシリア難民や遊牧民のキャンプの方角を迷わず指すことができる。（撮影・黄筱哲）

社・論

あの年を忘れるなかれ

◎訳・慈願

真夏は台風の季節で、先月の初めにも強い台風１１号が発生した。台湾に上陸はしなかったものの、その後の気圧配置で豪雨が中南部にもたらされ、多くの場所が冠水した様子は記憶に新しい。それはまた十年前の台風モラコットがもたらした被害を思い起こさせた。八八水害と銘打たれ、人々の痛ましい記憶は未だに拭い去られていない。

この島に生活している人々は万一に備えることを考えなければならない。二〇〇五年に世界銀行が発表した「天災の危険箇所：グローバルなリスク分析」という資料によると、台湾の災害危険度は世界でも相当高いとされている。国際災害データベース（ＥＭ－ＤＡＴ緊急事態データベース）の一九九〇から今までの統計によると、台湾の災害による犠牲者数は少なくなっているが、災害発生回数の増加に伴い影響を受ける人数は却って増えている。

気候の変化は予測出来ず、現在の地球環境において人類活動に起因して引き起こされる可能性のある災害はコントロールし難い。私たちは一歩進んで考えるべきだ。人は如何にして環境と共に生きるべきか？もし日常の秩序が災害によって壊された時、人々は如何にこの不調と向き合えばよいのか分からなくなるものだが、お互いに助け合うことによって力強く乗り越えていけるのではないだろうか？

二十年前の九二一震災を例にとると、證厳法師はボランティアに「善念が芽生えた当初に戻る」ことを訴えた。法師は今年の六月から七月にかけての行脚で、その大地震に関するボランティアの回顧話に耳を傾けた。当時の慈

済ボランティア達の忘れ得ない人生の意味を見いだそうと、まるで初めて聞くことように集中していた。「あの年を忘れるなかれ、あの人を忘れるなかれ、あの一念を忘れるなかれ」。

法師はしばしば口にしている。九二一震災は世紀の大災害だったが、その支援の様子は、『法華経』の「従地涌出品（じゅうちゆじゅつほん）」に述べているように、十方から善の心が馳せ参じ、菩薩が地から湧き出た光景を思わせた。この時台湾は愛と善に満ちた寶の島だと分かった。

本期の主題で報道しているが、当時、多くの重大被災地域は元々社会資源の比較的欠乏していた地域で、弱者家庭の人々も多く住んでいたため、復旧は相当な困難に直面してしまった。しかし幸いに、慈済の支援建設「希望工程」が安定した教育を支え、延続させることができた。時の移り変りの激しい中で、多くの教師が学生の人生を大きく方向転換させるための重要な役割を担った。

例えば国姓中学校には人目を引く「黒ダイヤプロジェクト」という。専門のコーヒー焙煎と芸術性に関する課程があり、生徒が故郷の産物に目を向け、自我の価値を高めることを目標としている。子供を正しく育成することが、家庭と地域の発展に繋がると教師たちは堅く信じている。

九二一震災当時、慈済が迅速に緊急支援を行うことが出来た背景には、地域単位で組織された防護ネットワークが既にできていたことが挙げられる。その後、支援のニーズに伴い、次々に「慈悲の科学技術」で災害支援装備及び物資の研究開発が行われた。また政府機構と共同研究を行い、ドローンで得た調査資料によって、緻密に計画を立ててから行動できるようになった。

今年の五月から、慈済は高雄国立科学技術博物館、国家地震工程研究センターと中央気象庁とが共同で防災教育展を開催している。世を震撼させた災害が世に対する警告となることを願いつつ、やかましい社会に埋もれて忘れられないよう、我々は次の世代に残していかなければならない。あの年を忘れてはならないと。（慈済月刊六三四期より）

20

台湾921大地震から二十年

回顧と悟り
あの年を忘れるなかれ

◎回顧録・顔霖沼、訳・済運
企画・李秀玲

1999.09.21

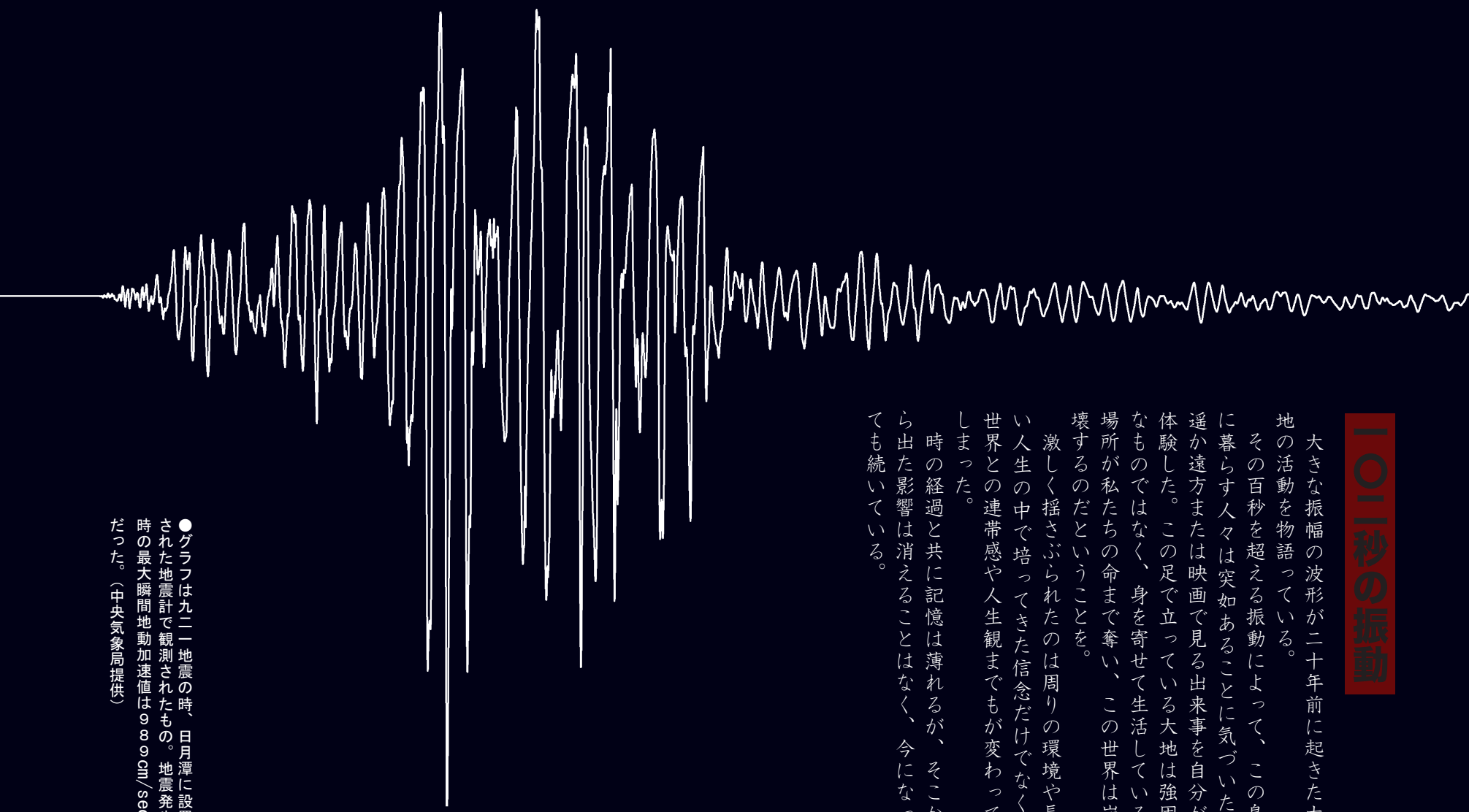
一九九九年九月二十一日、台湾はマグニチュード七・三の地震を経験した。草屯地方の九九峰は一瞬にして崩れ、禿山に変わった。今、山々は緑に映え、既に観光名所になっている。

二十年前、台湾全体で二千人余りが犠牲になり、一万人を超える負傷者を出したあの世紀末の大災害。多くの若者にとっては、「聞いたことがある」程度に過ぎない。

災害は傷跡を残し、過去を振り返りたくない。しかし当時、国際救助隊が被災者捜索に駆けつけ、国民が分け隔てなく再建に投入してくれた、あの情を忘れてはならない。

一時の無常な出来事で済ますのではなく、振り返って教訓として生かすべきであり、防災意識を高めて、大自然の力に対して己を謹み戒めるべきである。

九二一希望建設で建てられた福亀小学校の階段式舞台をイメージした九九峰の図柄。



●グラフは九二一地震の時、日月潭に設置された地震計で観測されたもの。地震発生時の最大瞬間地動加速値は989cm/sec²だった。（中央気象局提供）

一〇二秒の振動

大きな振幅の波形が二十年前に起きた大地の活動を物語っている。

その百秒を超える振動によって、この島に暮らす人々は突如あることに気づいた。遥か遠方または映画で見る出来事を自分が体験した。この足で立っている大地は強固なものではなく、身を寄せて生活している場所が私たちの命まで奪い、この世界は崩壊するのだということを。

激しく揺さぶられたのは周りの環境や長い人生の中で培ってきた信念だけでなく、世界との連帯感や人生観までもが変わってしまった。

時の経過と共に記憶は薄れるが、そこから出た影響は消えることはなく、今になっても続いている。

復興の中継ぎ

傷を負った大地と廃墟の中に約四年から六年間、中継ぎの家としての役割を果たした小規模な集落が異なった景観を作り出していた。

当時、台湾全土には百十二カ所、合計五千八百五十四棟の鋼鉄枠組みプレハブ式仮設住宅が存在した。地震で住む場所を失くした人々に、基本的な生活機能を有し、風雨を遮って長い復興期を過ごす避難所として提供された。

様々な原因から台湾はその後の復興再建でプレハブ式仮設住宅の建設を優先しなくなったが、慈済は引き続き被災後の支援経験を活かして、様々な機能を備えた中継ぎ住宅を開発し、条件に見合った地域でその機能を発揮し続けている。

●１９９９年１０月初め、南投県埔里鎮信義路に建設中の大愛村工事現場。慈済は地震発生から３カ月以内に被災者家族らのために、１７７６棟のプレハブ式仮設住宅を建てた。（撮影・蕭錦潭）

現場を保存し、実地教育に使う

殆どの地震災害地の建物は復興する過程で早い段階から取り除かれ、今は見ることができない。この災害記念碑のような存在は死の瞬間に時間が停止し、その標本を展示しているかのように壊滅の様相をその空間に残している。巨大な自然の力と設計不良の建築物の綱引きは勝敗が明らかである。

発生場所に保存しているのは、今後、益々メディアや資料に依存し、理性と想像によってしか当時の状況を理解できない世代の人々のため、一カ所だけでも直接、過去に戻れる場所を残しておきたかったからだ。記憶の保存と教育の意義の下に、実際の現場に身を置き、あの自然界の出来事を感じ取っていただきたい。

●階層が崩れた当時の建物が台中霧峰光復中学に保存され、九二一地震を振り返る教育の場となっている。（撮影・顔霖沼）

（撮影・洪瑞欽）

ハイレベルの建築基準

五十一カ所の希望建設で建てた学校は全て、鉄鋼の柱と梁を使った他、鉄筋をきつく縛ってコンクリートで固めている。それらは全てハイレベルな耐震設計になっており、厳しい品質管理と納入検査の下に施行された。

その構造設計の理論と建築法規を超えた要求やそれに伴う工事の複雑さ及び高価なSRC（鉄骨鉄筋コンクリート）工法に決定したのは、過去の劣悪な建築慣習を反省し、予知不可能な自然の力に対応するためであり、また次世代の生命を守りたいという初心に基づいている。

自然と共存する

完成当初の違和感に比べ、二十年経った希望建設の校舎と周りの環境はいっそう調和が取れていた。建物自体には風雨の浸食による傷跡が見られるが、大方、強固で問題はなく、子供たちを守るという当初の約束は忠実に守られている。

だが、それで終わりではない。将来、起こるであろうもっと極端で複雑な災害に対して、どのように対応し、それを使う人の繊細な人道的要求に寄り添っていくかが、今後、人類と自然または人同士が平和的に共存していく上での重要課題なのである。

●九二一地震の震源地である集集小学校の後方には集集大山が見える。（撮影・顏霖沼）

20

台湾921大地震から二十年

天地が揺れたあの日 生命の刻印

文・葉子豪　訳・有田夏子

1999.09.21

天地が揺れ動いた、あの夜。慈済ボランティアが真っ先に考えたのは、「私に何ができるだろうか？」ということだった。交通が途絶え、自宅が被災しようとも、人々を助けたい思いに変わりはない。彼らは災難の中、生死の悲しみと苦しみを経験したが、その場で力の限りを尽くし、生命に遺憾のない記憶をとどめた。

九九九年九月二十一日、深夜一時四十七分、尋常ではない揺れが、台湾全土で眠る人々を揺り起した。その瞬間、多くの人が寝床から飛び起き、驚き、逃げ惑い、叫び声をあげた。だが、起き上がる時間すら与えられることなく、一瞬のうちに、永遠の別れの痛みを残した人々も少なからずいた。

二十年前の台湾中部大地震を思い起こそうとしても、曖昧な記憶しかない人が多いかもしれない。だが家族を失った被災者にとって、それは一生忘れられない時間であった。また自ら救助にあたった人にとっては、生命の中に消し去ることのできない、強烈な学びの記憶を残した。

あの夜　震央の地「集集」で

台湾中部大地震は、震央が南投県集集鎮に位置していたことから、「集集大地震」とも呼ばれる。その震源の深さはわずか八キロメートル、規模はマグニチュード七・三に達し、南投と台中では、広範囲にわたる町が一瞬にして破壊された。南方の彰化、雲林、嘉義、および北部の苗

●台中の東勢鎮は、車籠埔断層の曲がり角に位置し、強い衝撃により多くのビルが倒れ、３００人以上が命を落とした。台湾中部大地震において、最も死傷者が多い地区となった。（写真提供・王一帆）

●台湾北部の新荘にあるマンション「博士の家」3棟の倒壊現場で、救助隊員が諦めることなく生存者を捜索していた。台湾中部大地震では、台湾全土で10万棟を超える建物が損壊した。20カ国からの救援隊が、台湾各地の被災地で救助活動に協力した。（撮影・郭以徳）

栗、当時の台北県及び市においても、死傷者が出た。震災後の政府統計によると、一〇二秒にも及ぶ長くて強い揺れにより、二千四百十五人が死亡し、十万八千棟余の建物が損壊したという。

自宅が集集鎮にある慈済委員、林慎（リンシェン）は語る。あの日深夜一時過ぎ、彼女が慈済の用事や家事を終えてようやく横になったとき、自分が大きなゆりかごに揺られているように感じた。強い眠気のため気に留めなかったが、頭上から物が落下して大きな音が鳴ると、ようやく危険が迫っていることに気づいたという。

「私が起き上がったとき、ドアはすでに開かなくなっていました。ドアを押し開けるのにどれほどの力を出したのか覚えていませんが、すぐに義母を抱きかかえて外に出ました」。呉厝里にある林慎の自宅に大事はなかった。実家の様子を見に戻ってきた隘寮里に住む娘が、沿路で多くの遺体を見たと怖れおののきながら言った。母と娘、そして夫の兄弟の嫁一人とが落ち合い、三人は慈済ボランティアとして、オートバイのヘッドライトを頼りに、停電で真っ暗な街に出て被

害状況を確認した。行く先々で、助けを求める人々の叫び声が聞こえた。

「消防隊の皆さん、助けに行っていただけませんか？」林慎は消防署へ駆けつけた。だが留守番中の職員は、「今、全員出動しています」と力なく答えた。災害はあまりに甚大で、救助隊員は奔走し、疲弊していた。生きている人の救助が最優先だった。林慎の夫の妹は不幸にして亡くなっていたが、今は倒壊した建物の下に残したまま、掘り出すことすらできなかった。

深刻な災害を目にし、通信もほぼ途絶える中、林慎は悲しみと恐怖を必死で抑えた。救助を求めるため、集集水道局に来て、電話を借りた。水道局員はおそるおそる室内に入ると、電話機を戸口まで引っぱった。林慎は花蓮の静思精舎への電話を試みた。

「落ち着いてください。住民の皆さんが飢えてしまわないよう、気をつけてください」。林慎が電話で救援を求めると、證厳法師ははっきりと指示を与えた。「現地のすべての人々の面倒をよく見てあげてください。何か必要なものがあれば、すぐに台中支部に伝えること。すぐに届けさせますから…」

それは朝五時過ぎのことだった。慈済花蓮本部は早朝三時になる前、既に救済総指揮センターを設置していた。台湾中部に位置し、深刻な被害を受けた台中では、職員である蕭恵特（シャオフイトー）が地震後の二時五分には民権路の支部に到着した。各地の被災状況や必要なものは何かなど、情報が次々と入ってきていた。事務担当、ソーシャルワーカー、財務、総務もそれを基に行動を始め、各地の慈済人もそれぞれ救援活動を展開していた。「生きているならば、やることがある！」この思いは、被災したボランティアたちの間で、図らずも暗黙の了解となっていた。素手でがれきを掘り出して、近所の人を助け

●台北松山の「東星ビル」倒壊現場で、ボランティア達はサービスセンターを設置し、被災者と救助隊員に対する後方支援を行った。（撮影・林鳳琪）

る者もいた。多くの人々が、自宅のことは後回しにして、より深刻な被害に見舞われた人々を助けた。

「やることは多い。ひとつ終われば次がある。まずは救援物資の配付、それから炊き出し、医療センターの設置、そして倒壊した建物の調査」竹山鎮延平小学校の曾彩琴（ツオンツァイチン）先生は当時を振り返って述べた。自宅でガラスの破片を少し片付けると、すぐにボランティアの制服を着て、救助に向かった。夜暗くなっても被災した自宅には帰らなかった。「私の家族は竹山中学校の校庭に避難しましたが、私は行きませんでした。慈済でやることがあり、あまり遠くへ離れたくなかったので、自家用車の中で眠りました」。

慈済は、台中市、台中県の霧峰、豊原、新社、東勢、南投県の埔里、草屯、中寮、竹山、集集などの地で、三十カ所の支援拠点を設置した。炊き出しやテント、寝袋、布団、携帯ライト、保存食などの生活必需品を提供し、二十四時間体制で被災者や救援人員をサポートした。

被災した人々が慌てて逃げ出した時、着の身着のままであったことを心配し、法師はボランティアにこう指示を出した。「今、被災者はお金を必要としています。すぐに救難慰問金を配付してください」。

「まずは、皆が家にあるお金を持ち寄ったけれどこれでは足りない」「銀行で引き出してください！」「停電で、銀行も閉まっています」。台北、台中の慈済人の報告によると、停電により、ＡＴＭも機能していないという。慈済本部は花蓮の銀行で現金二千万元を引き出し、台北と台中の被災地へ至急送り届けた。

全台湾が協力し　苦難を乗り切る

二十一日午前十時過ぎ、台中の慈済ボランティアはまず集集鎮の役場に集まった。救援車両に慈済の旗を掲げ、急ぎ救援物資を運び、被災地の人々に力を与えた。

林慎はボランティアに急いで尋ねた。「南投は？」「もう運動場に届けました」「中寮は？」「入れません」「水里と信義、そして鹿谷は、我々のいるここが救援拠点になります」。

各県や市の慈済ボランティアが次々と北部、中部の被災地に到着し、災害状況の視察、被災者への慰問、救援物資の配付などの作業を開始した。「苗栗と彰化の師兄（スーシオン）、師姐（スージェ）たちも来ていました。台南から来た人々はここで食事を作り、高雄からの人々は先に竹山に行きました。それぞれ行き先を分担していました」林慎は詳細に語った。

民間人が救済に奮闘している間、軍や警察、消防隊も黙って見ていたわけでは

なかった。高雄の慈済ボランティア、谷風泰（グーフォンタイ）は、当時陸軍総司令部作戦署の上校組長として、災害初期の救援にあたっていた。

「揺れが強かったので、これは震災になるとすぐ判断し、龍潭の総本部戦情センターを救援統括センターに変更しました。夜が開けるとすぐ、総司令官が最高幕僚幹部を率いてヘリコプターで中部の災害状況を視察しに行きました」。

震災当日の九月二十一日、陸軍総本部は豊原に指揮拠点を設置し、台湾中部に駐軍して救援の指揮にあたった。作戦命令を出して、南部の旅団クラスの一部隊、約三千人を急行させた。部隊は翌朝六時前には集集の被災地に到着して支援にあたり、また政府の各機関との連絡のため、通信体制を整えた。

その後、陸軍の救援統括センターは大里市の竹子坑営区に移された。谷風泰も共に駐留し、主に日々の救援活動や兵力、重機（民間提供の重機を含む）の調達や配置計画を担当した。駐留期間は一カ月に及んだ。

救命活動における黄金の七十二時間に、国軍、消防隊および民間の災害救援ボランティア達はがれきの下に閉じ込められた人々の救助に全力を尽くした。アメリカ、日本、韓国、ロシアなど二十カ国から、三十八の支援部隊も台湾に到着し、救助に加わった。不眠不休の努力により、幸い助かった人もいたが、重傷により命を落とした人の方が多かった。

「国軍はたくさんの『ご遺体袋』を集集に届けました。集集の死傷者は悲惨なほど多かったのです」と谷風泰は慨嘆した。軍のほか慈済も直ちに一千六百個の遺体袋を提供した。また被災者の遺体を冷凍保存するため、中国造船会社から冷凍コンテナ十基を借りた。海運とコンテナ輸送に従事する実業家ボランティアで

●地震の後、人々や物資が各地から被災地に集結した。深刻な被害を受けた中寮区では、慈済ボランティアが山積みになった生活物資を整理して、被災者への配付に協力した。（撮影・蕭耀華）

慈済災害支援の統計

◎訳・心愛

災害情況

◎1999年9月21日の午前1時47分、台湾中部でマグニチュード7・3の地震が発生した。震源地は南投県集集鎮で、深さ8キロ。台中、南投エリアの車籠埔断層によるもので、地表の亀裂は100キロに及び、強い揺れは102秒にも及び、台湾全土で揺れが感じられた。

◎死者2415人、行方不明者29人、負傷者11305人。家屋の全壊51711棟、半壊53768棟、全体の経済的損失はおよそ3647億元。

◎翌年、政府は9月21日を「防災の日」と定め、毎年防災訓練を行っている。

支援活動

◎31の支援対策センターが設置された（花蓮本部の総指揮センターを含む）。日常生活物資を提供すると共に、大型の炊き出し拠点を30カ所設置した。

◎19の施療ステーションを設置し、重点復興再建地域に2カ月常設し、慢性病や伝染病予防医療を提供し、延べ2052人の医療関係者を動員した。

◎1600の遺体袋と12基の冷凍コンテナを緊急に提供し、ボランティアが遺体の安置を手伝った。

◎国内外からのボランティアと善意の人々延べ18万人余りを動員して、仮設住宅、交番、消防署の臨時オフィス、簡易図書館、簡易守衛室及びお寺など1776棟が約7万平米の土地に建てられた。

◎被災した学校の支援再建プロジェクト「希望工程」は51校。

あった李宗吉（リーゾンジー）も配下の会社から冷凍コンテナ二基を調達して支援にあたった。

氷点下の低温で遺体が癒着することを防ぐため、慈済ボランティアは三十分に一度冷凍コンテナに入り、遺体の向きを変えた。「数珠はありませんか？私に一連いただけないでしょうか？」振り返ると遺体を運ぶ若い兵士が死との近さに衝撃を受けているようだった。慈済人は惜しまず渡し、彼らの心が安定するよう助けた。

谷風泰は、当時を思い出して語った。テントを張って料理し、救援隊の兵士に温かい食べ物を提供したり、家族を慰めたりしていたグループのことがとても印象に残ったと言う。退役後の二〇〇九年、正式に慈済に入ってからようやく気がついた。十年前震災の地で目にしたこの人々こそ、慈済ボランティアだったのだ。

震災後九日　住居建設を開始

大地震の発生から九月末まで、慈済ボランティアは延べ十万人余りを投入し、百三十万膳の炊き出しを行い、家を失った二十六万の人々に物資や医療支援を提供した。台湾全土の善意の人々から寄付があったおかげで、物資が不足する心配はなかったが、問題は被災者の住居だった。

「地震の後、勤め先の学校は授業停止

●慈済病院と慈済人医会は医療チームを編制し、9月21日午後に埔里、集集等被害が深刻な八地域で医療支援を展開した。（撮影・郭以徳）

になったので、私は慈済の救援活動に参加しました。戻ってきた時、学校は既に避難センターになっていました」と曾彩琴先生は当時を思い出して語った。地震から七日目、授業再開の準備のため延平小学校に戻った時、校庭は被災者の立てたテントで一杯だった。断水と停電により、衛生も保てなくなっていた。

テント生活を長く続けることは望ましくない。被災地の一日も早い復旧のため、證厳法師は五つの重点救済項目を指示された。被災地の消毒と伝染病予防、衛生設備の設置、政府の仮設住宅建設への協力、物資援助項目の明確化、そして悲しみを乗り越えようとする死傷者の家族に、長期的に寄り添うこと。

「身体を落ち着けることができてこそ、安心が得られます。被災者が心身ともに落ち着けるよう、住居の建設をすぐに始めましょう！」證厳法師の考えは期せずして、政府の安置政策とも一致するものだったが、住居やコミュニティの計画に求められる水準に関しては、より注意深く詳細に気を配られた。

被災者の心身の調和を考え、慈済の仮設住宅の間取りは、一般の住宅と変わらぬものとした。寝室を含む三部屋、リビング、ダイニング、バスルームを備える全十二坪の住宅で、一家に必要な機能が全て備わっていた。人々を励ますような住まいになればと望んだのだ。災害は一時的なことに過ぎず、一生続くわけではないと考えて立ち上がる意欲を失わないで欲しかった。

慈済が大愛村を建設すると知って、台中、南投、雲林など、被災地域の県や市の政府が次々に人を派遣し、また公有地の取得にも協力した。無償で土地を慈済に貸し出す善意の土地所有者もいた。九月二十九日、南投市中興新村にある徳興野球場で、慈済の仮設住宅が初の工事を開始した。続いて台中県、台中市、雲林県

等の地でも、仮設住宅の工事が始まった。

その間、台湾全土や海外から帰還した慈済ボランティア達が、持てる技能や体力を合わせて協力し、晴れの日も雨の日も、工事を急いだ。水道電気技師である陳金伝（チェンジンチュアン）は、当時台北から何度も南下し、東勢や南投の仮設住宅工事に参加したと言う。彼は地震の後、自ら物資を載せて運転し、被害が甚大な中寮郷に分け入った。だが単独で奮闘するよりも組織的に救済にあたった方が良いと考えたため、慈済ボランティアと共に力を尽くすことにしたと言う。彼は翌年、正式なボランティアの研修に参加した。

「我々は工事を仕事にしているから、これほどの工事に、普通はどれだけの時間がかかるか、よく知っている。だが多くの人が力を合わせれば、本当に早い！」

陳金伝は、仮設住宅の建設期間中、現場で千人もの人々が効率よく分担して作業していた様子を思い出し、そう語った。

「その目で見なければ、信じられないだろうけど。まるで早回しの映像を見ているようだった。今日地面を綺麗に片付けたと思ったら、次の日には基礎を打ち出し、まもなく外壁も出来てきた。まるで時間と競争しているような速さだったよ。皆をもうテントでは寝かせたくなかったし、地面がデコボコしていたのでこのままでは病気になってしまうと思ったからね！」

一九九九年十一月十五日、埔里の慈済大愛村三百二十戸が完成した。台中慈済ボランティアの洪武正（ホンウージェン）はよく覚えている。住民の中に若い女性がいて、五人の子供を連れていた。ボランティアが彼女の番号を見て、家の前まで案内した。女性と五人の子供は家の前に着くなり、互いに抱き合って激しく泣きだした。

この母親はまだ若いのに、子供はもう彼女と同じぐらい背が高かった。洪武正

●慈済は「９２１集集大地震、住民と心で繋がり、愛を総動員しよう」と題する活動を発起し、ボランティア達が街角で募金を訴えた。多くの人々がこれに応えた。（撮影・洪海彭）

●深刻な被害を受けた南投県中寮郷で、證厳法師が被災状況を確認していた。台中大地震の後、證厳法師は台中を拠点として被災地を奔走し、救援に関する指示を行なった。（撮影・黄錦益）

と数人の師姉が事情を聞き、ようやく分かった。五人の子供のうち、背が高い方は、夫の兄の子供で、彼女が背におぶっていたのは、夫の弟の子供だった。夫の兄夫婦、弟夫婦、そして自分の夫は死亡した。家族で生き残った大人は彼女がただ一人、この先どうすれば良いのかと彼女は泣いた。ボランティアはこの家族をケア対象に入れ、生活を助けることにした。

九月二十九日、大愛村の工事が始まった。国内外の慈済ボランティアや善意の人々延べ十八万人が協力して、三カ月間に南投、雲林、台中県、台中市で千七百戸以上の仮設住宅が完成し、十二月二十八日に工事を終了した。

続いてボランティアたちは被災地の学校に向けて、希望工程プロジェクト（台湾中部大地震により倒壊した学校の再建プロジェクト。五十一校の再建を手がけた）の支援に取り掛かった。同時に、大愛村の住民たちが安心して暮らしているか、毎月訪問によるケアを続けた。慈済教師懇親会と慈済大学青年懇親会は、希望工程プロジェクトの学校で冬休みと夏休みの課外活動を催し、地震の悲しみから立ち上がろうとする子供達に寄り添った。

体と生活が安定してこそ安心が得られる

「あれから二十年ですね。住民のみなさんはお元気ですか？」台湾中部大地震

で深刻な被害を受けた埔里では、あの年、三カ所の大愛村が建設された。慈済埔里連絡処は二〇一九年五月、大愛村の住民だった人々を再会の場に招いた。

当時埔里高校の教師だった高宗暘（ガオゾンヤン）は、自宅の建物が震災で倒壊し、帰るべき家が無くなった。幸いにも慈済大愛村が一家に最良の身のより所を与えてくれたので、安心して家の復興を計画することができた。

「もし初めから賃貸住宅に住んでいたら、心境は違ったでしょう。妻の心には地震の影が残っており、古い建物を見ると怖がったのです。特にれんが造りの家には、とても入ることができませんでした」と高宗暘は言う。仮設住宅に入居した時、妻は「もう地震を怖がらなくていい！」と喜んだ。理想的な住環境で、退勤後は早く家に帰りたいと思った。

「大愛村を離れる時、證厳法師や慈済から受けた支援を思い出し、感謝の言葉を伝えたかったのですが、その時は誰に伝えたら良いのか分からなかったのです。十七年後の今、その機会を与えられました。もう一度、感謝を申し上げます！」

高先生は、慈済が彼らを一番無力な時に助け、一家を心身ともに支えてくれたことに感謝している。現在彼は退職し、自身も公益のためボランティアに従事している。当時、自分たちを助けてくれた、多くの見知らぬ人達に報いたいのだ。

「この二十年来、慈済ボランティアは絶えることなく関心を寄せ、励ましてくれました。そして、私達が未来の生活に立ち向かう勇気をくれました」。九二一大地震当時、埔里鎮枇杷里に家族五人で住んでいた徐逢助（シューフォンジュ）は、地震で家が倒壊した。家計が苦しくなり、元の仕事以外にも、あちこちでアルバイトをしなければならなかった。幸いにも慈済大愛の家に身を落ち着けることができたので、一家は安心して困難に立ち向かうことができた。今年六十歳になる徐逢助は振り返って言った。「だから私は慈済の会員になりました。私も苦難にある人々を助けたいと思ったのです」。

あの年、多くの人々が歩んだ愛と生命の足跡は、もう消えかかっているかに見える。だが、記憶をたぐり寄せれば、今でも鮮明に思い出すことができるのだ。人と人の間の善と愛の種は、心の奥深くにしっかりと植えつけられ、決して忘れられてはいない。（資料提供・張麗雲、張美齢、鄭淑真、施金魚、許昆龍）

（慈済月刊六三四期より）

私の九二一物語

足で稼いだ再建の縁

新社小学校の教室棟は地震の後、壁に亀裂が入り、鉄筋が露出した状態になったが、長い間、支援してくれる対象が出て来なかったため、校長先生が不眠不休で支援を求めた結果、希望工程で完成した最初の学校となった。

口述・黄世忠（台中新社小学校・定年退職した校長）
取材と文・頼秀緞（台中人文記録ボランティア）
撮影・阮義忠　訳・惟明

九二一地震が発生したあの夜、大地が大きく揺れて人々を不安に陥れた。夜明け早々私は急いで外埔郷に住む教頭の欧慶龍（オウチンロン）先生に連絡し、一緒に山の上にある学校に駆け付けた。石岡に着いた後、車はそれ以上進むことができなかった。目の前の道路が高く盛り上がって通行止めになり、用のない人は出入りが禁じられた。我々は車を降りて徒歩で向かった。途中、倒木や落石に阻まれ、一時間程歩いてやっと新社に着いた。

東勢鎮と川を挟んで反対側に位置する新社街では、一列に家屋が倒れ、二階建

震災と再建を経て、２００１年希望工程で再建された新社小学校は第１期の卒業生を送り出した。

ての建物の一階が崩壊したり、止まっていた車が家屋の下敷きになっており、目に触れるもの全てに心が痛んだ。そして学校がどうなったのか心配になった。

やっと学校にたどり着くと、目立つ赤い校門は残っていたが、中を覗くとキャンパスの外壁は倒れたり、亀裂が入っていた。運動場は避難者で一杯になっていた。その先にある校舎は見る限り無傷に見えたが、教室に入って見ると悲惨さが分かった。壁から鉄筋が露出し、窓ガラスは割れ、教材は全て破損していた。地震の発生が夜だったのが不幸中の幸いで、それが昼間だったらと思うとゾッとした。

混乱の中、我々は先ず学生を落ち着かせた。台中盆地を取り巻く山岳地に位置する新社は素朴で穏やかな町である。新社小学校はその地域の中心的な学校で、百年の歴史があり、保守的な校風と伝統を固く守っている。地震という人知を越えた極限状態は果たして学校の契機になりうるだろうか？

補強か再建か？

家が倒壊したからといって子供達の学業まで止ってしまってはいけない。どうしたら速やかに授業を再開できるか？その時期、各学校ともテントを奪い合っていたため、私は早速豊原市の業者に頼んで、速やかに二十数張のテントを組み立ててもらい、十月四日には全校で授業が再開された。

初日、生徒たちは野外授業のような感じで新鮮に感じたようだ。だが授業が進むにつれ、昼間の強い日差しを避けるため、テントの淵に座っている生徒は太陽の方角によって椅子を移動せざるを得なく、落ち着かなくなった。また、雨が降ったり風が吹くと、テント内では埃だらけになった。

校舎の取り壊しも順調には程遠かった。一回目の鑑定結果は補強でよしとされ、再建の必要性が明記されなかった。二回目の鑑定も同じ結論だった。しかし、私は亀裂と鉄筋が露出した教室を見て、生徒の安全が心配だった。私は何年かすれば他校に異動するが、学校はずっとここに残るのだ。再三、三回目の鑑定をしてもらうよう教育局に頼んだ。

三回目の鑑定は台湾新幹線のシンガポール籍エンジニアを招いて行われた。その結果、確かに安全性が憂慮されるとして鑑定書に「校舎を取り壊して再建する必要がある」と書いてくれた。私はやっと肩の荷を下ろした。やっと学校は生ま

れ変わる機会を得たのである。

教育局が取り壊しに同意した後、軍部の協力の下に十月中旬、その工事が完了した。しかし、再建を引受けてくれる団体がなかなか現れなかった。一度はある団体が名乗りを上げたが、立ち消えてしまった。

本来なら補強するだけでよかったが、その時、自分がした大胆な決定に対して焦りと不安を覚え、どうしたらいいか分からなかった。そのまま放置して政府が建ててくれるまで待っても良かったが、台湾全土に数百もの学校が損壊しており、再建にどれほど時間がかかるか分からないため、教師と生徒にとって決して良いことではなかった。しかし、運命が朗報をもたらした。

校舎の裏の運動場では慈済（ツーチー）が新社の被災者の為にプレハブ仮設住宅を建てていた。十月下旬、證厳法師は工事の進み具合を見に来たが、初めて新社小学校まで足を延ばした。丁度、放課のチャイムが鳴り、生徒達が走り出て来たが、法師と紺色の服に身を包んだ人達の存在に気付き、好奇心で集まってきた。欧慶龍教頭先生がそれを見て、「早く二階に行って校長先生に、證厳法師が来られているが、もう直ぐお帰りになる、と知らせてくれ」と近くにいた生徒に言った。

その知らせを聞いて百メートル走でもするかのように、私は三階から工事現場に走った。法師はもう車に乗り込んでいたので、「誰も校舎の再建を引受けてくれないのです。引き受けてもらえませんか」と窓越しに訴えた。法師は微笑みながら、「校長先生、教育の仕事は深く末永く耕すものです。頑張ってください」と言ってくれた。私も「教育は私が志とする仕事です。必ず心を込めてやり通します」と返事をした。法師はその場ではそれ以上言われなかった。

翌日の十月二十七日、朝早く教育局の役人から電話があり、「校長先生、あなたの学校に吉報が寄せられました。慈済が新社小学校の再建を引き受け、潤泰企業グループが計画に協力します」と言った。その時、私の心情を反映したように、窓の外の曇り空から日が射し込んだ。奇跡だ！引受けてもらえたのだ！

そこには、もう一つのエピソードがあったことを後でボランティア達から聞いた。法師はその日、台中支部に戻っても心が重かった。十月十一日に慈済は二十五校の再建を引き受けると発表したばかりだったが、膨大な再建資金はまだめどがついてなかったのだ。そこへ更に新社小学校校長の願いを聞いてしまったのである。それでも慈済は引き受けると同時に、潤泰建設グループに協力を仰ぎ、再建を決めたという経緯があったのだ。

●２００１年２月、新社小学校は新しい校舎に引っ越した。２年生の担任である方玉秀教諭は「新教室の使用に関する規約」を手にし、愛で再建された校舎を大切に使うことをクラス全員と約束した。

第二の百年を造る

潤泰建設はそれまでオフィス・ビルや電子工場など高い技術が必要なビルを建設してきたが、新社小学校は初の公共工事だった。後になって「慈済の工事を引き受けるのは大変なことです。何故なら、慈済には自前の建設チーム、建築士、そしてボランティアが工事の監督をするので、基準がとても厳しいのです」と現場の作業員が私に話してくれた。

運動場の設計に関して、花蓮に行って法師に伺いを立てたことがある。設計事務所の張福明（チャンフーミン）総経理と建築士の潘怡群（パンイーチュン）が同行したが、彼らは帰りの車の中で設計図を手にしながら私に意見を求めた。運動場のトラックやメインスタンドに関して三時間余も話し合った。そして、校舎の側の古い木を残す為に、それを迂回してカーブ状の階段という趣のあるアイデアが出た。そこから新社小学校のキャンパスは子供たちと自然を優先する設計になった。

学校を再建すると同時に、子供たちの心も新たな一歩を踏み出して前向きになるよう導くことが大切である。全校の教師と生徒は学校再建の為に心を尽くし、二〇〇〇年四月にチャリティーバザーを催し、生徒と父兄たちがバザー用に中古品を持ち寄った。全収入は慈済（ツーチー）の希望工程に寄付された。

如何にして子供たちが感謝の心を持ち、そこから再出発できるようになるか？まずは生徒会に考えてもらい、教師にも提案してもらう。やる気と喜びを持たせることが大切である。

新教室の使用に関する規約

新社小学校は慈済が引き受けた「希望

工程」五十一校の内、最初に完成した学校である。全校教師と生徒は二〇〇一年一月二十日に新校舎に移った。

学校を再建できたのは容易なことではない。如何にしたら子供たちはそれを大切にし、感謝の気持ちを持つようになるか？学校は「児童自治市組織」を設けた。三年生以上の子供たちに投票権を与え、自治市長と学生幹部を選出するなど、生徒の法治教育の一環とした。新教室の使用開始前の会議で、教師は生徒にどういうことをしていこうかを考えさせた。

生徒幹部たちが討論した結果、「新教室の使用に関する規約」を提案した。その内容は「我々は仏教慈済功徳会の支援と、潤泰建設有限公司の企画、設計、施工に感謝します。我々は力を合わせて新校舎を大事に使い、その精神に則って下記の規約を遵守することを誓います。一、真面目に整理整頓に努め、教室内外の清潔を保つこと……十、損傷した箇所を見つけた場合は直ちに報告すること」。

全部で十項目あり、生徒達は真剣に余白に各自の名前を書いた。彼らの全員が「規約」の意味と責任を全て理解していなかったかも知れないが、福を知り、福を大切にするという心構えを皆で心を同じくしていた。

荘厳な建築は無言の説法でもあり、子供たちはそこから学んで心を落ち着かせることができるのである。教師も生徒も喜びに満ちて新校舎に入ると、多くの生徒が「学校がとても綺麗なので、放課後、少し居残ってもいいですか」と訊いた。生徒たちが帰宅したくないほど、学校は桃花源になったのである。

「九二一を忘れるなかれ」と法師が言うように、それは生きた教育の場となって、子供たちに感謝の気持ちを教えると共に、人格を培ってきた。感謝を知っている子供は自ずと人格が形成されるからだ。

私はずっと慈済の理念が好きだった。「悲智願行」。智とは十分な智慧と知識を持っていることで、子供たちを喜ばせるだけでなく、楽観的になるよう育てることが大切である。そのためには子供たちに明るさと希望を持たせたいのである。

母校が存在し発展し続ければ、成功の立役者は自分でなくても構わない。大理石や黒曜石はいつか壊れ、墓石に刻まれた文字を読む人が無くなても、永遠に残るのは人の心に刻まれた名前の方だ。

（慈済月刊六三四期より）

九二一希望工程プロファイル

◎台湾全土293校の全壊校舎を再建する必要があり、慈済は51の小中学校を引き受けた。南投33校、台中15校、嘉義2校、台北1校。2004年1月にすべて竣工した。（左図）

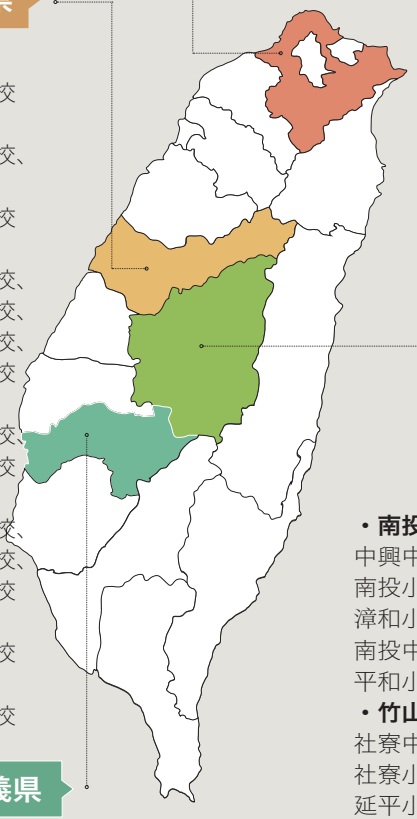
◎各学校の再建工事は慈誠隊（男性の慈済委員）が延べ10万人余りの地域ボランティアを動員して成し遂げた。

◎921地震の後、慈済が支援建設した学校は全て、「希望工程」と名付けられた。そこには、「親の希望は子供にあり、国や社会の希望は人材にあり、その人材を育成するのが教育であり、教育は即ち希望の工程である。

◎震災後、緊急に修繕したり仮設教室を建てたのは13カ所である。学校給食の支援は1999年10月1日から2000年2月1日まで、24校の小、中学校で行われ、2267人の生徒が恩恵を受けた。

◎校舎の支援建設だけでなく、心のケアも行われた。

- 1999年10月慈済教師懇親会が行った「臨時受け入れ他校生及び教師」安心プランは、2001年7月までに延べ36350人を動員した。
- 2000年1月28日から慈済教師懇親会は20カ所の被災した学校で「大愛を揺り動かし、『笑顔』を取り戻す」という教師と親子のクラスを開設した。2001年7月31日まで延12584人を投入して79回行われ、様々な学校から延13001人の教師と学生が参加した。
- 慈済教育志業体と慈済大学青年懇親会は2001年9月14日までの夏と冬の休みに被災地において、延べ4135人を投入して、55回研修キャンプを催し、住民と学生合わせて7216人が参加した。



臺北県

- **土城市**　清水小学校
（2002年331地震で損壊）

台中県

- **新社郷**
新社小学校
- **大里市**
塗城小学校、
大里高校、
瑞城小学校
- **霧峰郷**
五福小学校、
霧峰小学校、
桐林小学校、
僑栄小学校
- **太平市**
太平中学校、
太平小学校
- **東勢鎮**
東勢小学校、
東勢中学校、
東新小学校
- **石岡郷**
石岡小学校
- **豐原市**
豐東中学校

嘉義県

- **民雄郷**　大吉中学校
- **番路郷**　民和中学校
（両校は921地震と
同年の1022地震で損壊）

南投県

- **中寮郷**
中寮中学校、
爽文中学校、
至誠学校
- **国姓郷**
福亀小学校、
北山小学校、
北港小学校、
国姓中学校、
国姓小学校
- **草屯鎮**
旭光高校、
中原小学校、
炎峰小学校、
僑光小学校
- **集集鎮**
集集中学校、
集集小学校
- **埔里鎮**
埔里中学校、
埔里小学校、
大成中学校、
大成小学校
桃源小学校、
中峰小学校、
溪南小学校
- **鹿谷郷**
鹿谷小学校
- **魚池郷**
東光小学校
- **南投市**
中興中学校、
南投小学校、
漳和小学校、
南投中学校、
平和小学校
- **竹山鎮**
社寮中学校、
社寮小学校、
延平小学校、
竹山小学校、
中州小学校

◎訳・心瑩

（注）台北県は2010年に新北市と改名され、台中県と台中市は2009年合併されて台中市となった。双方の管轄下にあった郷・鎮は全て「区」に改められた。地名の後の鎮、郷は台湾の行政区画。

百の流れは海へと帰る

心ある慈済

奉仕とは金持ちだけがするものではなく、その心があればできる。「清らかな心」とは己を厳しく律すること。「慈悲心」とは人に寛容な心で接すること。この二つによって慈済志業は慈善奉仕と仏法修行に取り組んでいる。

◎文・林建徳（慈済大学宗教及び人文研究所教授）　訳・李曉萍（明浩）

社会には慈済は金持ちだと思っている人がいるが、證厳法師はこう答えたことがある、「慈済はお金を持っているのではなく、心を持っているのです」。

お金と心は違います。お金は具体的なもので目に見え、数えることができる数字です。心は見ることも、触ることもできない、内面的な感受性です。一般の人は具体的に知覚で分かる存在を重んじますが、法師は心の伝達が大切だと重ねて言っています。

それが慈済は金持ちというよりも、「慈済には心がある」といわれる所以なのです。慈済も「物で情を表す」ことをしますが、それは所謂、形有る財物を通して無形無相の愛と思いやりを表しているのです。

例えば、九二一大地震の後、慈済は災害援助だけでなく、被災者のために仮設住宅を建て、五十一校の小中学校再建プロジェクト「希望工程」で支援しました。当時、法師は規模の大きな学校を選んだため、その莫大な再建費用をどう調達するのかと周りの人々は心配しました。しかし、法師は自分こそが最適であり、正しいことであればやるべきだと考え、慈済がやらなけれ

百の流れは海へと帰る

ば誰がやるのでしょう?と言いました。

慈済はそれを義務として担いました。「己の無私を信じ、他人にも愛があることを信じる」という堅い信念を持てば、あらゆる難関を無事に突破することができるのです。

「慈済の心」のこの「心」には二つの意味があると思います。一つは「清浄心」もう一つの「慈悲心」です。「清浄心」は己を厳しく律することに用い、「慈悲心」は人に寛容な心で接することです。法師は自分自身にも弟子達にも、この二つの心を持つことを願っています。

己を清らかに律することは例えば、「静思家風」の自給自足と自力更生による勤勉で倹約した修行生活に現れています。社会からの寄付金は一切使うことなく、社会に還元するのみで、より高い道徳観で以て社会大衆からの愛を布施しているのです。「慈悲利他」。思いやるのは衆生の苦難であり、全ては他人のことを思い、行動しても、自分の安楽のためにしたことはないのです。

「清浄心」と「慈悲心」の導きの下に、布施を大切に預かり、貪らず求めず、財務面では厳しく透明さを保っています。もう一方で、布施は衆生を利益する道具と見なし、多ければ多いほど、その効果を最大限に発揮するよう努力しなければなりません。法師にとって、募金が多いということは責任も重くなると共に、社会の慈済への信頼と期待を象徴しており、慈済人はそれだけ重い任務と使命を背負っているのです。お金がある分だけ、もっと清浄心と慈悲心を持つよう修行があるのみです。

慈済志業の慈善活動と仏法の修行に対する重要な啓発とは何か、と問われたら、清浄心と慈悲心が一番良い答えだと思います。

（慈済月刊六三二期より）

E世代と善世代

他と違う「ポテンシャル太鼓」

若者が若者を教え、親孝行を訴える手話劇を演じる。太鼓チームは青春を打ち鳴らし、観客席では感動が続いた。善意を導き出すのは容易ではないが、限りない潜在力を引き出すことができた。

◎文・張麗雲　訳・済運

二〇一八年、慈済の七月吉祥月活動は大愛テレビ開局二十周年記念と共に、北部、中部、南部の各地で手話音楽劇『父母恩重難報経』と「人生を彩る絵筆」が演じられた。台中の場合は台北や高雄と異なり、三日間、二つの会場で同時に公演され、合計十六回演じられた。

舞台では背中に「POTENTIAL」と印刷された黒一色のTシャツを着た大勢の若者が「ポテンシャル太鼓で親孝行」という題の下に、若者が若者を率いて親孝行の道を「太鼓」で表現した。

「ポテンシャル太鼓で親孝行」という題名とそれに関連したものは黄雋勛（ホアンジュンシュン）の発想と設計によるものである。彼は大学でコントラバスをメジャーにし、抜群のスタイルとイケメンは才能溢れる芸術家の気質を備えている。巡回公演の時、父親の黄逸樵（ホアンイーチアオ）は二胡、端正な顔立ちの母親、の陳美君（チェンメイジュン）は琵琶を弾き、小柄だが聡明な双眸を持つ妹の黄榆真（ホアンユージェン）はピアノを担当し、その演奏は素晴らしかった。そして、特に舞台では黄雋勛が手に握っていたコントラバスが人の目をひいた。

●2018年8月18日、若者メンバーが中心の台中太鼓チームが七月吉祥月祝福会で荘厳且つ活力にみなぎった演奏を披露した。（撮影・周士龍）

中国と西洋の楽器で構成された「黄」家カルテットは愛の協奏曲を奏でた。両親も妹も認証を受けた慈済ボランティアだが、黄雋勛だけは独り家族と違って活発な性格だった。

違ってはいても、彼は黄家カルテットにはなくてはならない存在であり、毎年旧暦の除夜のパーティーでは黄逸樵は必ず一家全員を花蓮の静思精舎に引っ張って行く。そして、精神の故郷で年を越す慈済人たちのために演奏し、それが終わってから法師に新年の挨拶をする。その時、黄雋勛はいつも側で静かにしている。

二〇一四年に精舎で演奏した時、法師の目が黄雋勛に止まり、「認証を受ける気はあるのですか？」と軽く言った。彼は心の中では割り切れていなかったが、その場の空気から勇気を出して「はい！」と答えてしまった。

花蓮から台中に戻る途上、黄逸樵は目の前の出来事を引き合いに出して説得し、最後に彼らの期待を言った、「雋勛、養成講座の申込書をもらってくるから、私たちの希望を聞いてくれ」。

心の中で矛盾と反抗心がなかったと言えば嘘になると黄雋勛が言った。しかしそれが自分に害をもたらすわけではないと気づいた。とりあえず試してみようと思い、ボランティアの養成講座に参加した。

分かれば道は開かれる

黄雋勛は慈済が良い団体だということを知らないわけではなく、高校生の時から日常生活の中にはいつも大愛テレビの番組が流れていたが、母親が他のことに気を取られている時はリモコンで自分の好きな番組に切り替えていた。それでも知らない間に法師のお諭しの言葉が耳に入り、感動を覚えていた。彼もこの世に不公平なことがいっぱい存在することは知っており、できる人がその人たちを助けることが本当に必要だと感じていた。因果観に対しても彼は次第に自分の考えを持つようになり、何事もそれなりの論理と法則があることが分かってきた。

黄雋勛は、能力のある人は直ぐにでも奉仕すべきであり、それをネットに載せる必要があると思っている。彼はどうやって足跡を残すべきかを考えた。一般大衆が慈済のことを理解していないのは慈済人がいつも「善行は他人に知られなくてもよい」という考えを持っているからではないのだろうかと思いついた。それだったら、逆に「善行を人に知ってもらう」ようにしたらどうだろう？

彼が言いたいのは、情報が氾濫しているのに、真実が報道されていない時代で、大衆は慈済が黙々と善行していることを知らない。慈済の外にいる人間によって

見聞きしたことを演じることで、自分の周りから次第に慈済に対する見方を変え、いつか誰もが善悪の判断ができるようになるのではないかと思っている。

一期目の養成講座を終え、黄雋勛は続けて慈誠（男性の慈済委員）になる養成講座に参加した。「僕の目標は至って簡単で、周りの人に慈済は非常に良い団体であることを知ってもらいたいだけです。他人の見方を変えたいだけでなく、慈済の五十周年に認証を受けるのも違った意味でカッコいいと思います」。

彼は二〇一六年に認証を受け、「今回の選択は間違っていませんでした。この二年の間に得たことは、『やったことのない事をするのが成長』であり、今回の『苦を見て福を知る旅』は僕の音楽表現を豊かにしてくれました」。彼は胸を張って言うことはしないが、同じユニフォームを着て、要請された時に皆と一緒に奉仕するだけである。

経文を理解してから太鼓を打つ

二〇一七年、慈済の実業家ボランティアたちは「世界に大愛を・この世に心の蓮が満ちる」と題した祝福コンサートを催し、苦難に喘ぐ人たちのために愛の心を募った。ボランティア団体の呼びかけで数多くの若者が呼応し、黄雋勛も太鼓を打つことで愛を伝えた。しかし、コンサートが終わると中部地区の四十人の太鼓手が一人、二人とチームを離れて行くのを見ているしかなかった。

その時、新たな任務が出現した。ずっと北部、中部、南部の若い太鼓手を指導してきたボランティアの呂慈悦（リューツーユエ）は彼らに一つの目標を与えた。二〇一八年の音楽手話劇、『父母恩重難報経』である。「経

●呉錡峯（ウーチーフォン）（後列右から1人目）は経典劇を演じる過程で、高校生の時に言うことを聞かず、両親が悲しんでいたことを知らなかったと懺悔した。今はボランティアの仕事に責任を持って臨み、同じ志を持った人たちと共に善に向かって進んでいる。（撮影・翁旭昇）

典を演じる前にその内容を理解する必要があるため、読書会を開かなければいけません」と彼女が言った。

台中の青年太鼓チームの主要人員は呂媛菁、黄榆真、黄雋勛、沈怡潔、洪嘉澤、楊佳真らで、二代目慈済人である。幼い頃から慈済に触れ、直ぐに慈済人文精神に融けこむことができた。しかし、彼らは今時の若者の嗜好に合わせないと、もっと多くの若者に来てもらうのは容易ではないことを知っていた。

黄雋勛と妹の黄榆真も同じように感じていた、「読書会を開くだけでは誰も来ないし、読書と聞いただけでサンキュー、また、連絡するよ、と言うでしょう。それは連絡してくれなくてもいいという意味です」。「それなら若者の集まりをやろうじゃないか」という暗黙の了解がチームの中にでき上がった。

北、中、南部の鼓手は皆、自分たちのスローガンがなければ、若者は参加しないと感じていた。ある日、台中チームが台北チームのE時代に相応しい「彗星が脳みそを突き破る」という斬新な題名を見て、自分たちも「中部地区に相応しい名前をつけよう」と提案し、『ポテンシャル太鼓で親孝行』、Potential にしよう！」となった。

「ポテンシャル太鼓、Potential は親孝行効果抜群！これはいい。深い意味があって、台中太鼓チームの潜在力は果てしないことを表している。きっと同じ志を持った若者が集まってくる」と全員一致で賛成した。

ポテンシャルチームは木彫りやお菓子作り、手芸品作りなど様々なことを共有する。『父母恩重難報経』の手話劇では動作で表すことが多いため、黄雋勛は音楽界の仲間に呼びかけて人文コンサートチームを結成し、音楽で以って喜怒哀楽を表してもらうことにした。

集会場所は様々で、誰かの家であったり、絵画展の鑑賞や郊外へピクニックに

●台中太鼓チームは２０１８年の八二三熱帯低気圧水害の後、台南の被災地で民家の清掃を手伝った。（撮影・簡明安）

行ったりする活発で趣のある活動であっても、人文から離れることはない。

若者がいた

慈済家族には「老人グループ」に参加しようとしない二代目が少なからずおり、おじさんやおばさんとは話が合わないと思っていた。

●「ポテンシャル太鼓で親孝行」の若者たちは積極的に慈済のボランティアをするだけでなく、社会を正しい方向に導こうと考えている。チーム名を付けた黄雋勛（1列目右から3番目）は、自分が湧き出る泉となって周りに異なった空気をもたらしたい、と言った。（撮影・許舒婷）

しかし、親の説得の末に一回来てみると、本当に親の言うように若者も居ることを発見した人もいる。若者同士なら会話が弾んで参加する気にもなり、やがてチームメンバーは増えていった。

公演する二週間前、殆ど毎晩リハーサルしたり手話の練習をした。その時になっても新たに若者が参加し、年齢も様々だった。大学を卒業した者から中学生もおり、一番若いのは十三歳だが、皆あまり落ち着きがなかった。この若者たちに何時間も手話の練習に専念させ、繰り返しリハーサルさせることがチームの一大挑戦だった。

企画を担当した黄榆真は、慈済のことを知らず、落ち着きのないこの若者たちにこの経典劇を演じる重要性を分からせ、慈済人文を尊重させる方法を模索して加減しながらやっていくことを学んだ。

「今の子供たちは意思の疎通方法が私たちの時代とは大きく違っています。どうやってそれが真面目な活動であることを分からせ、それでいてプレッシャーを掛けないようにするかです。彼らを愛する一方で尻込みさせたり面白くないと思わせてはならないのです」と黄榆真が言った。

前もって周到に計画を立てたりリハーサルしなければ、きっと問題が起きることを彼女は知っている。因縁観が必要で、良縁がなければ成就しない。「職場では

いつも戦々恐々としていて、間違いは許されません。しかし、ボランティア団体では誰もが同じ目標に向かって、身も心も奉仕し、汗と涙を流して社会を利する大きな仕事を達成させるのです。職場とは違うのです。皆が集まった縁を大切にして最高に打ち解けた状況を作り出さなければなりません」。

一緒になって感動した

「子過」の一幕を演じた二十六歳の劉岳翰（リウユエハン）は「この内容は自分と父の関係を演じているようで、父に対する怒りがここで解き放たれました」と言った。

両親が離婚して家族と離れ離れになり、祖父母に育てられ、内心の不満と思春期の反抗が相乗効果となって彼は堕落する瀬戸際まで行ったが、母親が温かく彼を支え、悪への曲がり角で徘徊する息子を引き戻してくれたため、タバコも悪友とも縁を切ることができた。

二〇一八年五月、彼が母の日に用意したプレゼントは、母が参加して欲しいと願った、『父母恩重難報経』の手話劇に出ることだった。チームへの参加者が数人に始まって十数人へと増えていった。皆が一つの事を同じ目標に向かって進み、初めて手話を習い出してから習得するまでになり、劉岳翰自身も感動した、

「今回、汗と涙を流して歩んできたことは大切な記憶になるはずです」。

公演が成功裏に終わって一つの目標が達成され、「これは新たなマイルストーンの始まりです」と劉岳翰が言った。ポテンシャル太鼓チームの若者たちには永遠に善の力を伝えていくという目標がある。彼はメンバーを集め、刑務所で服役している若者と一緒に「報恩」の手話劇を演じたり、台南の水害に苦しむ民家の清掃手伝いや「朝山」（注）活動に参加した。「より多くの若者に善の団体に触れるよう呼びかけ、彼らに精神訓練の機会を与え、経験のないことを勇敢に体験してもらえれば、ちょっと変わった若者になれるのです」と彼が言った。

（注）朝山拝礼、三歩毎に五体投地する礼拝方式。

「ポテンシャル太鼓で親孝行」を思いついた黄雋勛は「ポテンシャル太鼓」をこう定義した：「困難だと分かっていることに敢えて挑戦し、皆で潜在力を使って自分を表現する」ことである。正しい人と共に行動すれば、困難な事に出会っても互いに支え合うことができ、任務を達成させて清々しい気持ちになれる空気がチームに流れるのは、正にポテンシャル太鼓が成長している証である。

（慈済月刊六二八期より）

【證厳法師のお諭し】

愛の奉仕に愛を知る

◎訳・慈願　絵・陳九熹

行って見て、実際に投入してこそ、苦の中にある本当の苦を知り、
福の中にあっても福を知らずにいたことに気がつくものである。
菩薩道とは自分の足によって歩き出すことであり、
身を以て奉仕に励めば、さらに心の内に愛の法悦が満ちる！

毎年中秋節の良き日は、慈済（ツーチー）にとっても喜ばしい日なのです。

今年は九月中旬に世界慈済人医会の年次総会が花蓮で開かれ、二十四の国と地域から五百人のメンバーが一同に集まりました。台湾の慈済人は、たとえ見知らぬ相手であっても慈済大家族の一員として真心こめて出迎えました。

天上の月は丸く、地上の大家族も丸く大きく集まり団らんのひと時を楽しみました。

中秋節に愛でるのは天上の月だけではありません。皆の心にある同じの月を愛でているのです。天上の月は時には雲に遮られますが、人々の心の中にある月は永遠に明るく澄み切っていなければなりません。修行とは外に向かって求めるのではなく、心の内の煩悩、無明を取り除き、心の内にある月を工夫して磨き、一点の曇りのない鏡になるまで磨きあげなければなりません。この大円鏡は静寂にして清く、何の妨げも受けず何ものにも染まらないので世の中のすべてを見通すことができます。

凡人の見ている月は一年にたった一度の中秋名月だけですが、実のところ愛でるべき心の月は時時刻刻と存在しているのです。人には元々真如の本性が備わっているのですから、心が清らかであれば、近くや遠くの誰彼と分け隔てることなく、虚空に心の月が上り、至る所を照らすことができましょう。

今年の世界慈済人医会年次総会では、四百人以上の台湾ボランティアがすべての仕事を受け負い、遠くから来られた会員を丁重にもてなしていました。それだけでなく五大大陸から来たメンバーが参加するすべての講義を七カ国語に翻訳していました。その四日間は医療の交流だけでなく、お互いの愛を温め、また各国の慈済人医会メンバーや慈済ボランティアが居住地における奉仕状況を紹介し合い、貧苦の人々に寄り添う愛の力を結集させました。

参加した医師たちは時間と仕事を犠牲にした上、自費で施療に赴いているのです。医療機具や薬品を携え、様々な道を苦労して移動してやっと目的地に着きます。そして施療を行った地域が医療に立ち後れている場合は、持って行った医療機具を当地の医療関係者にすべて残していきました。

皆この世に苦難の多いことを悟ることで自ら進んで人助けを申し出るようになります。志を一つにして共に歩み、謙虚に奉仕する気持ちが必要なのです。

モザンビークの中央病院シポラ副院長は、年次総会の要請を受けて参加し、サイクロン・イダイ風災で台湾から多くの医療スタッフが施療と支援にきてくれたことに感謝を述べました。副院長によると、中央病院は国立とは言え、四つの省における後送先であり、平均

一人の医師が八千人の患者を受け持っていて、常に医、薬、設備が欠乏しているところを風災に襲われ、病院の建築物、特に重要な手術室が破壊されたため、テントを張って患者の手術をしていたのだそうです。

どこの国でも医療水準は異なり、全てを満たすことは難しくても、モザンビークの医療環境がこれほど厳しいとは誰も想像していませんでした。南アフリカの温聖（ウエンション）釣（ディアオ）医師は年会の中でこう語りました。当初慈済がモザンビークの被災地に支援を呼びかけていると聞いた時、それほど高い航空券を買って支援に行くより、そのお金を直接支援に回した方がよいと思っていたところ、現地へ行って自らそれを見て来てはどうかという勧めがあり、それを聞き入れたそうです。

モザンビークの災害地域で彼が目にしたのは、南アフリカよりも見るに堪えない苦しい生活でした。また住民と慈済ボランティアの親しい様子や、慈済人がしゃがむと喜んで駆け寄ってきた子供たちをごく自然に抱き上げていた微笑ましい光景でした。子供たちと患者の笑顔はお金では買えないものだと、彼は実感したのでした。

子供たちは言い尽くせない苦難の中ですべてを失ってもこのように天真爛漫に微笑むことができるのだと知って、彼は愕然としました。歩いて自分の目で見て実際に投入して分かったことは、福の中にありながら自分の幸せを知らなかったことでした。苦を見て福を知ったならば、その縁を逃さず、さらに福を造ることです。

布施奉仕することで法悦が得られるということを口で言っても体得することはできません。機会を逃さず体で以て務め励めば喜びが得られるのです。「経者、道也。道者、路也（仏法は道也。歩む道也）」といつも言うように、菩薩道は我々の足元にあり、その路を歩くことによってこそ、路の風景をよく理解することが出来、菩薩の心が啓発されるのです。そもそもこれが仏陀のおっしゃった法なのです。

菩薩は事実この世に存在します。「衆生が苦から離れることのみを求め、自分の安楽を求めず」といわれるように、愛の奉仕はさらに内心の愛を感じさせます。生命の価値は日々行く先々にあるため、命ある一分一秒を無駄にしてはなりません。皆さんの精進を願っています。（慈済月刊六三五期より）

お板さんが法の香に浸る

家事から処世術を学ぶ

◎文＆絵・阿板（凌宛琪）　訳・高雪白

昨年暮れ、私は懿仁（イーレン）さんと一緒に静思精舎で食堂の手伝いをした時、色々なことを学びました。

普通、精舎では毎日数百人が食事をし、食後、食器を洗う前に、先ずヘラで食べ残しの汁やおかずを夫々集めます。そうするのは食べ物の無駄を無くすためであり、また、皿に油けが少なくなっているので、食器洗いに使う酵素も水も節約できるのです。

数回やった後、懿仁さんは、残りのおかずを集める時、おかずやお皿によってヘラの使い方と力の入れ具合が異なるのが分かったと嬉しそうに言いました。それは人と接する時にそれぞれ異なった方法で対応しないとうまくいかないのと同じです。

それを聴きながら懸命に働き、毎日どんなに忙しくても、楽しく働き、収穫があれば、疲労を感じません。

監督の盧建彰（ルージエンジャン）さんが執筆した、『発想力とは：あなたの問題を発想で解決する』という本を読んだことがあります。「本当に良い話とは、誰にも知られない真実であるが、後で誰もが感服するような出来事である」。わたしたちの身の周りにはこのような良い話が沢山あり、その中には人生の道理があるのです。それを目で見て学ぶのであれば、家事から始めたらいいでしょう。（慈済月刊六二九期より）

●作者：凌宛琪（お板さん）。慈済基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」朝会でＰＣなどの設備セッティングを担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで発表し、分かち合っている。

特別報道 上

アラブのミスターチェン

◎文・林玲悧（台中人文記録ボランティア）撮影・王瑾　訳・善耕

大砂漠の武勇伝はよく知られているにもかかわらず、陳秋華（チェンチウホワ）はしばしば「私は一人ではない。みんなの愛が私と一緒にいるからだ」と言う。現実の世界に戻った時、彼は依然として「とてつもなく大きい福田と非常に少ないチームメンバー」という困難に直面している。

しかし、苦難を見ると助けずにはいられない。それは「菩薩道の果てには苦難の衆生がいる」との證厳法師の言葉の証である。

「救援物資が運ばれて来るのを見ると、米であれ何であれ、彼らは手を伸ばして、くれ、くれ、欲しい、欲しい…と言うのです。その場にいなければ、彼らの生活でどれだけ必要とし、困っているのかは想像できません」。とヨルダンのボランティア林芝（リンツー）が言った。

「配付の時、ある子供が騒ぎ出しました。それは、以前或る団体の配付の仕方が彼らを不安に陥れたからです。たとえば、二百人分必要なのに救援物資は二十人分しかなかったのです。慈済は長年配付の経験があり、配付券さえ持っていれば、必ず物資は貰えると言い聞かせても、彼らは不安で、物資がだんだん少なくな

●慈済ボランティアの陳秋華（右）は一昨年に慈済の支援で3つ口の矯正手術を受けたシリア人の子供を慰問し、体調を気遣った。

るのを見ると落ち着いていられなくなるのです」と陳秋華が言った。

「濟暉（陳秋華の法号）、停まってはいけません。私は自分の血を使ってでも難民を救済したいのです」と證厳法師は優しくおっしゃった。陳秋華ははっと目が覚めた。夢だったのか！

二〇一六年八月に行われた配付活動では、難民の情緒不安定によって騒ぎが起き、互いに押し合う状況が出現した。その情景は陳秋華を悲しませた。毎月の配付活動を止め、慈善基金を医療費に回せば、数百人の三ツロや無肛門症の子供が手術を受けることができるという思いが胸の内に芽生えた。思いもよらず、その夜、證厳法師が夢に現れ、自分の意志が十分に堅くないことを深く懺悔した。

二〇一七年二月十二日、台北国際会議場で三回、「大愛のある世界・心の蓮がこの世に満ちる」福を祈るコンサートが開催され、一万人近くが参加した。コンサートの席上で、陳秋華は「私はシリアの難民に懺悔しました。彼らを放棄しようと思ったことがあるのです。難民はそれを聴いてとても動揺したのか、皆泣いていました」と言った。

「私はどう感謝したらいいかわかりません。シリアの人々が安全に故郷の土を踏むまで、台湾人は愛の心で寄り添ってくれていることに、ただ仏教の最敬礼である頂礼を以て感謝するしかありません。ありがとう、ありがとう！」

後戻りするはずがない

壇上で陳秋華が「頂礼（五体投地）」をしている場面は多くの人に感動を与え、シリア人に嫁いだ台湾人の賴花秀（ライホワシオウ）も会場で涙を流した。「ミスターチェンはシリアとは血縁関係のない武士です。しかし、彼は五体投地して全ての人に感謝することができました。その時、私は本当に感動しました」。

賴花秀は雲林出身で、一九九四年に台北で働いていたシリア人の夫と結婚し、二〇〇七年にシリアの首都ダマスカスに定住した。二〇一三年六月、彼女は十歳の息子を連れて台湾へ里帰りした。元来八月にシリアに戻る予定だったが。内戦がますます激しくなるとは予想していなかった。夫は彼女たちに、当分の間台湾に滞在するよう言った。そうして家族は別々に暮らすようになった。

「私と慈済の縁は禍を転じて福と為すと言えるでしょう。シリアでの戦争は苦しいものですが、それをきっかけにミス

●慈済ヨルダン支部とハシミ慈善団体は、「タラボット社会教育センター」プロジェクトで協力し、シリア難民の子供とヨルダンの貧しい子供たちをケアした。10歳のセンタシは竹筒歳月の話を聞いて、賴花秀に人助けの願望を話した。

ターチェンと知り合ったのです」。彼女はシリア難民の世話をしようと思い、二〇一四年にヨルダンに来た。「来たばかりの頃、秋華師兄（スーシオン）夫婦に付いて、障害のある三人のヨルダン人の姉妹を訪ねました。その時、私は彼ら夫婦が米を担いで階段を登っているのを見ました。その階段はとても高く、私でさえ上るのが大変でした。その時、この人はどんな人なのだろうかと思いました。私はその偉大な力を学びたいと思い、その時から、彼と一緒に慈済の仕事をしています」。

彼女はシリア難民であり、敬虔なイスラム教徒である。昨年慈済ヨルダン支部の職員になったが、就任してから四カ月後、自分には少し荷が重すぎて担えなかったので辞めたかった。今年一月、慈済ヨルダン支部の認可が下りた。彼女は陳秋華が「二十一年と四カ月後に、やっと開設できた」と言ったのを聞いた。それに対して彼女は「ミスターチェンは二十一年と四カ月も初心を堅持して来たのに、私はたった四カ月で投げ出してよいのだろうかと自分に問いました」と言った。

心優しい勇士

陳秋華を知るヨルダン人は皆、彼をミスターチェンと呼び、賴花秀は彼を「武士」、ハッサン王子は「優しい巨人」と呼ぶ。證厳法師は「彼は四大志業と八大脚印を着実に実践しています。イスラム教の国で大将軍となって、衆生を済度しているのです」と言った。そして「大将軍」という言葉で彼を形容したのは、彼がテコンドーで最上位の九段のマスターであるだけでなく、ヨルダン皇室のハッサン王子のテコンドーコーチ兼顧問でもあるからだ。長年にわたり、彼は選手たちを

率いて国際大会でしばしば素晴らしい成績を上げてきた。

今年のラマダンには二千六十九世帯に配付したが、一世帯分が二十キロを超える支援物資を持ち、砂漠を駆け抜けて配付するには勇気が必要だ。背丈の高いアラブ地元のボランティア、例えば アブトーマス、ケーダーコーチ、及びテコンドーの学生などが後方で物資を搬送した。誰も争って功績を鼻にかけないだけでなく、比較的辛い仕事も引き受けていた。彼らはミスターチェンの弟子たちや学生の父兄だった。

ケーダーコーチは高校時代から既に陳秋華の生徒だった。師弟の絆は三十六年にわたり続いている。大柄なアラブ人は恩師のミスターチェンの話しに及ぶと感動し、心優しい勇士の表情になる。彼は武芸を学んだだけでなく、恩師の「竹筒歳月」の精神を彼の勤めている公立学校で実践している。「私は貯金箱を作り、毎日二十クラス全部に行き、金額の多少に関わらず、生徒に募金することを教え、そして毎週募金金額を公表しています」。

ある時、彼は交代で出席している兄弟がいることを知った。彼らは一足の靴しか持ってなく、交代で靴を履いて登校していたのだ。また制服を買う余裕のない貧しい学生もたくさんいた。そこで、彼は卒業生に「サイズが合わなかったり、着用できないユニフォームがあれば、寄付してほしい」と呼びかけた。多くの衣服は古くて破れたりしていたが、寄贈者の気持ちを傷つけないために、それらを全部引き取り、新たに整理した。

ラマダンを迎える前、校内のすべての学生は家族に募金活動をしようと提案した。中には服や靴を寄付する裕福な家庭の父兄もいた。子どもたちは皆、これらの寄付金と支援物資が最も貧しい生徒たちを助けるためのものだと知っていた。

愛と慈悲は無形だが、それを宣揚して実践すれば、行動を通して、愛のさざ波は現実的に少しずつ広がり、伝わっていくのである。

慈済の代弁者

ヨルダンのマフラクはシリアとの国境付近にあって、多くのシリア難民が滞在している都市だ。ヨルダン救援組織は、賃貸している民家の二階を研修センターとして、六歳から十四歳までの子供に勉強を教えており、また何度も慈済の施療活動の場として提供している。マフラク研修センターの校長であるアブアメール

は、初めて慈済に接した時、多くの慈善団体がすでに撤退した後で、慈済が彼らを支援してくれることに期待していなかった。しかし図らずも慈済は有言実行で、今に至っている。学校から報告された手術ケースは全てミスターチェンとボランティアが付き添って治療を行っている。彼は非常に感動して、「私が慈済の代弁者になってあげます」と言った。

大砂漠の武勇伝はよく知られているにも拘わらず、陳秋華はよく、「ヨルダンは遠いが私は孤独ではありません。みんなの愛が私と一緒にいるからです」と言う。しかし現実の世界に戻れば、彼は依然として「福田は非常に大きく、チームメンバーは少ない」という現実と向き合わなければならない。

二十二年間、慈済がヨルダンで行って来た志業は、クリスマス、イースター或いはラマダンの時だけ行われる活動ではなく、毎日、毎年、絶え間なく行っているもので、パレスチナ難民に始まり、シリアの難民、砂漠の奥地から都市の周辺にいるベドウィンまで、苦難に喘ぐ人を見れば、支援に尽力するのである。

かつて或る人が見かねて、どうしてそんなに一心に投入するのかと聞いた。「あなたはそれを見なかったふりをすることはできないのか？」と言った。またある人も「こんなに多くの難民を、どうやって救うのか」と聞いた。彼はただ実直に「慈済と縁のある人々だからだ」と答えた。

早朝から夜更けまで、日々苦しみに喘ぐ人々がいる。あらゆる危険や困難は菩薩の愛と苦難に対する支援の歩調を阻止することはできない。また苦難から人々を救い出す足どりを阻害することもできない。陳秋華の足跡は法師の言葉を立証している、「菩薩道の果てには苦難の衆生がいる」。（慈済月刊六三三期より）

●ザータリ難民キャンプの外のテントエリアで、ボランティアが支援物資を配付した。そこに居住している人々は、全般的に生活が貧しく、ボランティアによる配付活動もいつも大変だが、それでも長年ケアが続いている。

ヨルダンの大砂漠に慈悲のナビゲーション

文・林玲悧（台中人文記録ボランティア）　訳・慈願

ヨルダンの大砂漠のあちこちで暮らしている貧苦のベドウィンとシリア難民を探しだせるだろうか？現代人は携帯のGPSを使って道を探す。だがヨルダンの慈済ボランティアは心の中に愛というGPSを備えている。広大な荒れた大地でも迷わず、真っ直ぐ遊牧民キャンプに辿り着ける。苦難の衆生が何処に居ても、彼らは必ずその方向に向かう。

●見渡す限り黄土の大地を前に、陳秋華師兄は散らばって住んでいるシリア難民や遊牧民キャンプの方角を迷わず指すことができる。（撮影・黄筱哲）

「辺境は一面果てしない黄砂です。突然空が暗くなったかと思うと、大雨が降り出し、黄砂は泥濘に一変し、泥濘の底はデコボコなため、大雨の中では往々にしてタイヤがパンクするのです。テントはどこまでもぬかるんだ荒野に続き、電気もなく、四月の風雨の中、指がかじかみながら、三十人余りがブリキ小屋の中で勉強していました」。

今年の四月二十三日、前文化部長の龍応台（ロンインタイ）女史が個人のフェイスブックに「辺境―ヨルダン手記」を記載し、シリア難民が異国で流浪の苦に陥っていることを彼女はその身に感じた。また難民児童が教育に渇望していることも述べている。彼女はまた「戦争は一年また一年と続き、嬰児を泥濘んだ土地の上で出産し、幼児はテントの中で成長し、少年はわが身の境遇を明白に感じ始め、老人は異郷で涙して亡くなる」と書いている。

ある日、龍女史は慈済ヨルダン支部のボランティア・頼花秀（ライホワシュウ）の案内で、マフラクの研修センターとフウェイヤのキャンプを訪問した時、この世の苦難と難民支援に投入している慈済ボランティアの姿を見た。「世界でも最も絶望感が漂う荒涼たる黄砂の地で、台湾の慈済ボランティアが子供たちに朝食を出し、僅かな給料を先生たちに出すことで子供たちに教育を受けさせると共に、流浪して七年間テント生活をしている難民のために水や電気を引こうとしている」と書いている。

他郷へ放浪

この文章がメディアに掲載された時、ヨルダンでラマダン配付活動に参加した台湾の慈済ボランティアたちは既に準備を整えて再びヨルダンに向かうために待機していた。五月一日から十四日の二週間の配付活動の中で、慈済メンバーが如何にして定期的に貧苦のベドウィンを訪問し、シリア難民の医療と教育上の困難に対処しているかをこの目で見た。

ヨルダンには僅か二本の道路が南北を貫通しているだけで、道路以外は一面の荒涼たる砂漠地帯だ。小道はあるものの何の標識もなく、ＧＰＳ地図には一面の黄土しか表示されない。現代人は道を探す時、紙の地図より携帯のグーグルマップでＧＰＳに頼ってしまう。だがヨルダンの慈済ボランティア陳秋華は愛のＧＰＳを心に備えており、苦難の衆生がいる所なら、広大な砂漠であろうが遊牧民のテントを探し出し、方向に迷うことはない。

●フウェイヤ村のマリアン一家が喜んでレンガの家を貸してくれたので、ボランティアは灌仏会を催し、同時に夜間配付を行った。（撮影・王瑾）

フウェイヤ村の遊牧民キャンプもこのように住所はなく、広大な砂漠の中に経度と緯度が示す一つの点があるだけだが、八万人のシリア難民を収容するザータリ難民キャンプからは近く、シリア国境からは僅か五・五キロしか離れていない。

五月十二日、ボランティア団体は首都アンマンから出発して三時間半後にフウェイヤ村のキャンプに到着した。そこから北側はシリア国境で、ぐるりと見渡すと地平線の彼方に街のスカイラインがかすかに見える。

シリアから逃れてくる難民には二つの選択肢がある。一つは難民キャンプに入ることで、国連及び各国のＮＧＯから衣、食、水、電気、教育、医療資源を受けられるのでそちらを選ぶ人が多いが、要所要所で監視されている。もう一つはフウェイヤ村のマリアン一家のようにヨルダン砂漠を彷徨いながら政府に家賃を払う方法だが、生存の基本的保障はない。ただ最も貴重な自由はある。

互いに礼儀を尽くす

慈済がヨルダンに慈善の根を深く下ろしてから二十二年、二〇一九年一月二十三日にやっと社会部で立案に成功し、慈済ヨルダン支部は正式に国際非政府組織（ＩＮＧＯ）の資格を取得した。毎年五月の第二日曜日は、灌仏会と母の日、世界慈済デーの三節句を祝う日で、今年の五月十二日にヨルダン支部は荒涼たる砂漠のムスリム部落で灌仏会を行い、ムスリムの村人と共にラマダンを過ごした。夜はそこに泊まり、翌朝早く子供たちと一緒に学校に行った。

ボランティアが初めて来た時、先ず無邪気な子供たちに囲まれ、次に赤子を抱いた女性たちが取り囲み、珍しそうにボランティアの一挙一動を観察した。フウェイヤ村のキャンプは年配のマリアンが中心になっている。彼女の粛然とした顔には刺青があり、空き地に置いた椅子

にじっと座って静かにあたりを見廻していた。

マリアンは七十歳で、夫は既に亡くなった。二〇一二年に家族とシリアから逃れて来て難民キャンプに入った。二〇一七年に現在の土地を借りてから新生活を始めた。

ヨルダンに来た時は二十世帯だったが、今では二十七世帯に増えている。居住空間はテントから逐次拡大して、レンガと粗いセメントの壁でできた家になったが、窓はあってもガラスがない。家の前には蔓の伸びた葡萄、裏には囲いの中に羊を飼っている。彼らの生活は大変だが、新しく定住地を作り上げつつあることが分かる。

アラビア世界では子沢山を良しとする考えがあり、マリアンも七男、四女を育てている。ボランティアが灌仏会の会場を準備していた時、一台の車が入ってきた。農場で働いている息子たちが帰ってきたのだ。彼らが車から降りて真っ先にするのは母親にキスすることだ。

ボランティアは潅仏会の準備を済ませた後、陳秋華の自宅で栽培しているバラの花とペットボトルを切って作った「蓮花灯」を瑠璃仏の周りに並べると、荘厳粛然とした雰囲気が醸し出された。潅仏会が始まると家族の年配者が皆の先頭に立って敬虔な祈りを捧げていた。

日没に断食を終え斎戒を解く

砂漠の奥深くまで行くと、澄みきった空気中には一点の塵埃もなく、青空に白い雲、その素晴らしい景色があり、また日没の絢爛たる夕日は、絵葉書のように美しい。日没後ボランティアは二十七世帯、百四十人以上の村人に夜間配付を始めた。辺り一面真っ暗だったが、幸い慈済から贈られた、五セットのソーラー電灯が高々と掲げられていた上に、車のライトを点けたため、十分明るくなった。

こうして初めてヨルダンでの夜間配付が無事に終わった。マリアンの息子、アリが音楽を流すと子供たちが踊り出し、次いで女性たちも加わった。ステップを軽やかな音楽に合わせ、ボランティアたちも直ぐにできるようになった。明かりが邪魔することのない砂漠では、銀河が

●陳秋華がカジャに手渡した大切な贈り物は、夜に使えるようにと静思精舎の徳善師匠から託されたソーラー発電の卓上ランプだった。（写真提供・ヨルダンのラマダン期間に配付活動を行なったチーム）

天空に横たわり、遠くの星まで瞬いていた。郷愁と辛い生活のことを忘れられる最も平和な時間であった。

中休みの後、二人の可愛い子供の劇が始まった。アラビア語の劇をボランティアは理解できなかったが、幸いに現地ボランティアがアラビア語を理解していたため、通訳してくれた。「牛乳に水を混ぜてはいけない、人を騙してはいけない、人は正直でなければならない……」

心温まる家庭の集いに、先生のような人物が幼い子供に演劇で以て人としての道理を教えていたのだ。その人物はいったい誰だろう？

カジャは一九八九生れで、マリアンの末娘だ。二〇一七年から子供たちを学校に行かせ、放課後は補習をした。プレハブ小屋を臨時教室にし、椅子も机もないため、子供たちは地べたに座って課外授業を受けていた。

教科書も教材もない状況下で、高校しか卒業していないカジャは自分の記憶と知識で以て子供たちに『コーラン』の朗唱と簡単なアラビア語や基礎算数を教えていた。

以前、国連児童基金会は毎月百七十五ディナールをカジャに支援していたが、二〇一八年六月限りで中止になった。生活のために、彼女は兄たちと農場でトマトの採集のアルバイトをして家計を助けなければならないため、子供たちにもっと良い教育を与えることが出来ないのだ。二〇一八年十二月から慈済ヨルダン支部が引き受けることになり、カジャに教師手当の支援を開始した。手当を受け取った彼女が真っ先に考えたのは自分のためではなく、子供たちに机と椅子を買うことだった。彼女の善の心に感動し、ヨルダン支部は彼女の願いを叶えた。

カジャは毎朝子供たちに付き添って登校し、十一時四十五分に授業が終わると歩いて家に帰る。子供の勉強に付き添っているうちに、彼女は教師がどのように

学生に教えているかを学んだ。陳秋華は、彼女は高卒だが、プロの教師以上だと褒めている。カジャの努力はヨルダン政府も認めており、正式に教師の資格が与えられた。

今年の三月、慈済ボランティアは再度フウェイヤ村のキャンプを訪問して、子供たちの登校状況を理解して百五十人分の学習用品並びに本部からの先にＬＥＤが付いたボールペンを贈った。

電気のない現地ではこのペンは貴重だ。一人の子供は余分に一本入っていたため、返しにきた。ボランティアが「誰が正直であることを教えたの？」と聞くと「カジャ先生よ」と答えた。難民の生活はこんなにも苦しいが、幼い子供でも正直である姿にボランティアは心を打たれた。

教育は明るい灯

「私たちはシリアに四つの大きな農場を持っており、七百世帯の大家族でした。しかし、今は家もなくなり、皆、散り散りになりました」。家の前で皆が歌い踊っている時にカジャがボランティアに言った、「しかし、今晩はヨルダンに来て七年間で一番楽しい夜です」。

真っ暗な砂漠では星の輝きが殊更目立つ。この難民家族の遭遇と生存のため、生活のため、教育のために強く活きているのを見て非常に忍びなかった。台湾ボランティアの黄福全（ホワンフーチュエン）は「これが私の国際支援で初めて経験した夜間配付活動です。世帯数は多くなくても、とても心温まります。触れ合う中で彼らの慈済ボランティアへの愛を感じました」と言った。

夜も更け、明日は子供たちは登校しなければならない。規律のある集会は十時に終わった。ボランティアはカジャを教室に招き、遠い国からの贈り物を渡した。陳秋華から手渡されたその贈り物はソーラー発電の卓上ランプだった。静思精舎の徳善法師がカジャの愛に感動して自分が使っていたものを贈ったのだ。

以前或るシリア難民の父兄が「シリア難民の次世代の未来は完全になくなりました。なぜなら学校に行けなくなったからです。登校出来ない日がどれだけ続くか誰にも予測できません。教育のない次世代は終わりです」と言った。

また難民児童には学業の過程で、民族の違いや衛生が悪いために、戦争による種々の精神的な障害が原因となっていじめに遭い、教育を受ける権利がありながら家に籠ってしまう子もいる。

シリア難民の児童からすれば、教育は陽光や空気、水のように不可欠であり、明るい未来への希望である。フウェイヤ村キャンプの子供たちは幸いにもカジャ先生が教育に尽力してくれており、次世代が消えることはない。

ラマダンでの潅仏会式典

「ラマダンカリーム」。ラマダンが始まると、陳秋華が毎日この言葉で村人に挨拶するのを耳にする。ラマダンとは斎戒月でカリームは祝福という意味である。この月モスリムは戒律を守り、日の出から日没まで飲食を禁止する。斎戒の過程を通じて、自律と自省をして全ての人がより思いやりと寛大になることを期待する。

慈済ボランティアは如何にして慈済精神をイスラム国土に持ち込むことができるだろうか？法師は「人は創造された肌の色、国籍、宗教を超越して、心中にただ一つ『愛』だけを残せば良い」と言われた。一九九七年、慈済はヨルダンで慈善活動を始め、現地の貧民と中東難民に関心を寄せ、その中でも医療支援ケースが千例余りになっている。今年のラマダンではボランティアが十四日間にヨルダン国境を隈なく歩いて二千世帯余り、一万余人に恩恵を与えた。

愛を極限まで発揮させれば、慈済精神を伝えることができ、今日、民族や宗教を超えることで、仏教徒がモスリムのキャンプで潅仏会の式典を行うことができたのである。モスリムと仏教徒は共に開斎し、一緒に菜食を享受した。

潅仏会の式典で行われる「仏足を拝む」、「花の香りを受ける」それぞれの儀式用語の意味は、内心の無明と塵埃が清められることを願ったものである。イスラム教であれ、仏教であれ、規則や戒律、名称は異なっていても、宗教の含意を深く探求すると、人類が清浄無垢の本性に回帰し、広い心で愛を他人と分かち合うよう呼びかけていることは同じである。（慈済月刊六三三期より）

●陽射しの下で約一時間スクールバスを待つフウェイヤ村の子供達。教育という曙光が彼らに希望をもたらしている。（撮影・王瑾）

現実と向き合う

堪忍の世界に生まれたなら、苦しみに耐えなければなりません。試練と思い、衆生の苦難を体得するのです。

◎文・釋德侃／訳・済運

善の回路、良い習慣

「台湾には平穏で豊かな生活があります。その福を惜しんで更に福を作らなければいけません。それは喉の渇きを癒し、生活のために汲む井戸水のように、どれだけ汲んでも井戸の水位は下がることなく、また、誰も水を汲まないからといって水位が上昇することもありません。多く使っても少なく使っても増えも減りもしませんが、その水を人のために使えば、恩恵をもたらします。私たちが自分の『井戸水』で人々を幸福に導けば、自分にも福をもたらします」。

雲嘉地区の慈誠委員と座談した時、上人はこう言いました。「人との関係で互いに関心と思いやりを持って接し、自分の親しい人に愛を与えるだけでなく、心を大きく持って縁も所縁もないこの世の衆生を愛するのです。どこかで災害や苦難が起きたことを知った時、直ちに脳の『慈悲利他』の領域が刺激されます。その後、慈悲心が起きて奉仕する行動に出れば、その領域は持続して活発になり、善の回路が形成されます。そして無私の人助けをする良い習慣が身に付くことで、その領域は容易に無明に覆われることはなくなります」。

雲嘉地区の若い世代が重責を担っているのを見て、上人は嬉しくなると共に、経験豊富な慈済ボランティアが道を切り開き、人々を導いて来てくれたことに感謝しました。「彼らは歳をとり、体力は衰えて来ましたが、それは自然の法則であり、人生で直面しなければならないことです。福のある人は病苦に苛まれることなく、人生の

最期まで慈済で奉仕を全うすることができますが、多くの人は病苦から逃れることができないため、耐えるしかありません」。「私は毎日、こう自分に言い聞かせています。堪忍の世界に生まれて来たからには、様々な衆生に接しなければならず、自分で病苦を経験しなければ、衆生の苦しみを理解することはできないと。病苦を試練と見なし、老いることの苦しみを体得して現実と向き合うよう、毎日、自分に言い聞かせています」。

「一秒たりとも時間を無駄にしてはなりません。歳だからと言って隠居したり、何もしたくないと思うのは間違いです。歳だから余計に体を動かすのです。今は時間との競争ですから、一時間でも多く行動すれば、それだけ多く得るところがあり、一回でも人を利する話をすれば、それだけ多く人と良縁を結ぶことができるのです」。

上人は、「引き継いだ後は付き添うことです。若い人もお年寄りに感謝と尊敬の念を持ち、愛で以て年長者の世話をすべきです。年長者か若者、ベテランか新参入者に関わらず、皆、慈済という大家族の法縁者なのです。互いに思いやりと励まして以て力を結集することで人心を浄化し、平和な社会を実現させなければいけません」と念を押しました。

敬虔さと慈悲心が道場を成就する

七月六日、上人は台南静思堂でボランティアとの座談会で、台南静思堂の由来について語りました。「莊慎私（ジュアンシェンスー）さんが一九九二年に、慈済の台南静思堂建設のために仁徳インターチェンジにほど近い土地を寄付してくれました」。

「莊慎私さんは既に亡くなりましたが、今朝、彼の妻である黄秋香（ホアンチウシアン）師姐（スージェ）が来ていたのを見かけ、当時、莊さんがこの土地を寄付してくれたことを思い出しました。彼はとても敬虔に慈済が受け取って

くれるよう、自宅の仏堂で祈っていました」。「その年、屏東に行脚した時、莊さんは朝早く、その土地の所有権状を持って屏東支部にやって来ました。それを仏像が置かれた机に置き、師匠が喜んで受け取ってくれるよう、とても敬虔な態度で私にお願いしました。私はそれを聞いてとても感動し、お礼を言いました」。

「彼がその土地を寄付してくれなかったら、私たちは今日、ここに集まることはできなかったのです。静思堂は建設されると普段は菩薩の修行道場として使われています。毎年、慈済人がここで認証を受け、社会で菩薩精神を発揮して善行しているのです」。上人は二〇〇九年の台風モラコットの災害と二〇一六年の地震被害に触れました「台南の慈済人は静思堂に災害支援センターを立ち上げ、各地のボランティアを集めて、炊き出しなど各種任務に当っていました」。

慈済人が自発的に苦難を助け、深夜でも早朝でも直ちに出動して現場で奉仕していることに上人は感謝しました。災害が人的被害をもたらす中、慈済ボランティアは嫌な顔も見せず、被災地に出向いて支援します。一人ひとりが敬服に値する人間菩薩なのです。

「皆、寺院に出かけて願を掛けたり、仏や菩薩に祝福や平穏な加護を祈っていますが、本当は善の因を作って善行しなければ、福の報いは容易には得られません。莊慎私さんの心は敬虔で、自分のためではなく、円満に土地を寄贈して荘厳な菩薩道場を建て、数多くの人間菩薩を成就させることだけを望んでいたのです」。「それは彼の心願であり、彼の敬虔さによってその心願は達成できたのです。それは仏像が加護したのではなく、彼の心にある菩薩が決心したことで、慈悲心が起きてこの土地を喜捨しようと思ったのです。法脈と宗門がいつまでも受け継がれるように、皆でこの道場を大切にしましょう」と上人が言いました。（慈済月刊六三四期より）

慈済大記事十月

訳・済運

10・01	宜蘭県蘇澳鎮南方澳で港に架かる橋が崩落し、死者6人（外国人を含む）と負傷者6人を出した。慈済ボランティアは慰問活動を展開し、事故現場に支援拠点を設置して救助隊員たちに炊き出しを行った。また、病院に負傷者を見舞うと共に、員山福園葬儀場で犠牲者家族を慰めた。4日と5日に桃園地区のボランティアが遺体の輸送を引き継いだ。7日と8日には宜蘭県政府主催の追悼会が開かれ、慈済ボランティアの他に慈済科技大学の外国籍学生が通訳をした。ボランティアは8日までに延べ469人が動員された。
10・05	◎慈済基金会が支援建設した花蓮の三民中学校では、本日、寄贈及び使用式典が行われた。慈済の減災希望建設で7校目の学校である。 ◎静思精舎の德悅師匠と德イン師匠及び慈済基金会の職員4人と台湾のボランティア4人で構成されたアメリカ会務ケアチームは、5日から13日までシカゴ、ダラス、テキサス、ニューヨーク、ワシントンの各支部を訪れ、アメリカ東部のボランティア組織の運営や会務の推進状況に関心を寄せると共に、アメリカ東部一日精進活動と大愛人文センターの開幕式に参加した。 ◎シンガポール、フィリピン、カンボジアの慈済人医会メンバーとボランティアによるチームがカンボジア・バタムバン州立病院で592人を対象に、外科と眼科手術前の検査と視力検査を行い、355人に老眼鏡や近視用メガネを処方した。 ◎慈済マレーシア・セラゴン支部は5日と6日、クアラルンプール静思堂で第3回マレーシアとインドネシア実業家交流セミナーを開き、双方から570人の実業家や医療関係者が参加した。
10・06	グアテマラ慈済ボランティアは本日、市政府において8月にパレンシア市で起きた降雹被害の被災者に対する配付活動を行った。9キロの黒豆、トタン板、エコ毛布、多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）など

	の物資を３３世帯に届けた。
１０・０８	嘉義大林慈済病院はシンガポール・クーテパック病院と５年間にわたる協力覚書を交わした。地域社会の医療、完全介護、長期ケア、臨終ケア及び菜食の栄養などに関して意見交換する。
１０・０９	静思人文志業股份有限公司が『静思語三十周年記念収蔵版』を出版した。證厳法師の法語を編集した『静思語』は１９８９年に初めて刊行された後、次々とシリーズで関係の書籍が出版され、今では２２カ国語に翻訳されて多くの国で出版されている。
１０・１２	マレーシア・セラゴン支部と国防大学人道援助及び減災研究センター（ＨＡＤＲ）は、マレーシアの人道ケア組織・マイケアと共に１２日から１４日までクアラルンプール静思堂で人道援助行動展(Humanitarian Operation Exhibition）を開いた。ポスターや座談会、救済予行演習などを通して、民衆の人道支援、災害復旧、環境保全とボランティア精神への意識向上を目的としたものである。
１０・１５	第７回アジア都市論壇が１５日から１７日までマレーシア・ペナンで開催された。１５日、国連環境計画（ＵＮＥＰ）の主催とペナン政府、大阪市政府、グローバル環境センター基金会（ＧＥＣ）、ペナングリーン議会連合などの共催の下に、第１９回都市イノベーション会議が開かれ、ペナンでの資源の回収と循環経済を模索した。慈済マレーシア支部は招待を受けて参加し、ボランティアの蕭益光が代表で慈済の環境保全の由来とペナンに於ける資源回収の経緯、環境保全教育の推進などを報告した。
１０・１６	１２日、台風１９号が関東地区に上陸し、甚大な被害をもたらした。慈済日本支部は１６日と１８日にそれぞれ、埼玉県川越市と宮城県で被害状況を調査すると共に、避難所の被災者が使用する１０００枚の

	エコ毛布を宮城県丸森町区役所に届け、２０日には川越市で被災後の清掃活動を手伝った。
１０・１９	◎タイ・チェンマイ慈済学校は創立１５周年を迎え、校長先生を先頭に８４人の教師と学生がバンコクのＴＲＩＡメディカルウェルネスセンターで２回感謝のお茶会を開き、長期的に学校を支援してくれている善意の人たちに感謝すると共に、創立以来の運営状況と教育理念を報告した。 ◎慈済シンガポール支部は、創設２６周年記念行事で慈済人文青年センターにおいて記録映画「如常」の鑑賞会を行い、６６２人が参加した。２０日は静思堂で記念行事と半日精進活動が行われた。静思精舎の徳寧師匠と徳格師匠、慈済慈善基金会顔博文執行長、編集処の洪素貞主任らが講演し、６３５人が出席した。 ◎花蓮慈済病院は衛生福利部の「漢方内科専門医師訓練プロジェクト」に於ける第一回客観的構造式臨床技能テスト（ＯＳＣＥ）を実施した。病院駐在漢方医は４年の訓練を終えた後、再び最新の漢方内科専業医師訓練を受け、ＯＳＣＥテストに受かれば、衛生福利部から漢方内科専門医師の資格を得ることができる。
１０・２０	慈済ベトナム連絡所のボランティアと慈済人医会メンバーは、ホーチミン市漢方委員会の阮文有漢方医ら３０人のチームと合同で、平陽省新淵市で施療活動を行い、５７０人を対象に漢方など６つの科で医療奉仕を行うと共に、眼科ではその場で眼鏡を処方した。
１０・２３	慈済マレーシア支部は「光華日報」新聞社と報道に関する協力合意書を取り交わした。光華ネットワークに慈済専用の枠を設け、人間性の美善及び正確な真実を報道することで、社会に良善の風を吹き込むことに努めていく。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１９年１１月１５日発行・２７５号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・王麗雪
校　閲　黒川章子
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

手をつないで人間の苦しみを取り除く

慈済人医会シリーズ

ヨルダンの慈済ボランティアは当地で２２年間続けて慈善活動を行なっている。今年はようやくヨルダン政府からＩＮＧＯの認証を受けた。その後７月に初めての大規模施療活動が７月に行なわれ、シリア難民とヨルダン貧困家庭の人々を診療した。ヨルダンの医師モハマド（中）とアメリカの慈済人医会の廖敬興医師（左）は、受診登録人数が一番多い歯科で患者を診て、治療前の分類をした。

（撮影・蕭耀華　ヨルダン Ghawr Al Mazraa 2019.7.30）

慈済ものがたり